

1 私を育てたあの時代、あの出会い

専門性を追究し続ける大切さを
先輩の後ろ姿に学んだ

山口県山口市立小郡中学校校長◎臼杵裕世

特集

3 「授業」で生徒を、学級を伸ばす 第1回

中学校教育の
不易と流行

4 はじめに

中学校教育の歩み

6 課題整理と今後の方向性

今、そして
これからの中学校教育が担うもの全日本中学校長会会長◎新藤久典
全国連合小学校長会会長◎向山行雄

12 事例に見る不易と流行 1

50年続く「バズ学習」を基盤に
集団の力で学力向上を図る

岐阜県土岐市立泉中学校



18 事例に見る不易と流行 2

統合4校が互いに学び合い
新たな学校文化を創造する

長野県阿智村立阿智中学校



23 事例に見る不易と流行 3

風通しの良さと広域連携で
小規模校の校内研修を活性化

山形県尾花沢市立福原中学校



28 資料

データで見る中学校教育の課題

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

東日本大震災の被災者の皆さまに、心からお見舞い申し上げます。 VIEW21編集部一同
※今号では山形県の学校の記事も掲載しております。

*本文中のプロフィールはすべて
取材時(2011年3月)のもので
また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い

第5回

専門性を追究し続ける大切さを 先輩の後ろ姿に学んだ

山口県 山口市立小郡中学校校長 白杵裕世 USUKI HIROYO

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、白杵校長が語る。

感性を磨き続けることが
指導力を伸ばす

教師歴7年で赴任した中学校は25学級もある大規模校でした。美術教師は私を含めて3人。そのうちの一人、山路光男先生に私は大きな影響を受けました。先生は当時50歳くらい。作品は必ず仕上げるように指導する、厳しい面のある先生でした。その姿勢は私たち後輩教師に対しても同じでした。ある日、授業の準備をしていると、山路先生に「戸は閉めるものだよ」と言われました。美術では彫刻刀などを生徒に貸し出すため、戸棚からよく出し入れします。その引き戸が開いたままだったのです。また、私が封筒を手で破いて開封していると「封書ははさみで開けなさい」と注意されました。細かく見ているなあと思いましたが、美術は道具を使う教科です。安全面や生徒指導面も考えて道具を大切に扱うのは当然の心構えでした。そしてそれ以上に、次に戸棚を使う人や手紙をくれた人への気遣い、普段から一つひとつの所作を丁寧に行う大切さを先生は伝えたかったです。私は自分が戸を閉めるくせが付いてようやく、そのことに気付きました。

うすき・ひろよ 高校時代に美術部に所属、美術教師を志す。山口大教育学部附属光中学校、都濃郡鹿野町立鹿野中学校校長、岩国教育事務所所長等を経て、2009年山口市立小郡中学校に赴任。山口県中学校文化連盟会長なども歴任。



高校時代

絵を描くうちに
美術の教師を志す

1973 (昭和48)

新採として厚狭郡
楠町立吉部中学校
(現宇部市立楠中学校)
に赴任

1979 (昭和54)

下関市立
山の田中学校に赴任。
山路光男先生と出会う

1986 (昭和61)

山口大教育学部附属
光中学校に赴任。
授業研究に力を入れる



授業研究はテーマごとに
冊子にまとめた

1994 (平成6) ごろ

地域の社会人向け
絵画教室などで
ボランティア講師を務める

1999 (平成11)

都濃郡鹿野町立
鹿野中学校
(現周南市立鹿野中学校)
に校長として赴任

2009 (平成21)

山口市立小郡中学校に
赴任

*プロフィールは取材時(2011年3月)のもので

「自分では分からない良さに 気付かせるのが教師の役目」



山路先生は制作活動にも意欲的に取り組まれ、展覧会に毎年出品し、個展を何度も開かれていました。授業と校務、展覧会の世話役等も務められ、とても忙しいはずなのに、自分を律して制作していたのだと思います。私も大いに刺激を受け、長期休業などを使って制作に励みました。新たな技法を身に付けると、表現の幅が広がって、感性も磨かれます。教師は好きな絵を描きながら続けられる仕事とっていました。

制作は教科の専門性を高める上で重要だと学びました。今考えると、山路先生に影響を受けた一つひとつの出来事が深く心に刻まれているのは、作品制作を通じて専門性を追求する姿勢に、私が深く共感し、引かれていたからだと思います。

**一人ひとりの良さを見付け
更に伸ばしてあげたい**

35歳で赴任した中学校では、授業研究に打ち込みました。山路先生を

真似て、学校近くの有名な海岸など地域性のある素材を教材に取り入れました。また、美術の授業は個人制作に終始しがちですが、私は集団指導の良さを生かして生徒の力を伸ばしたいと考えました。例えば、生徒に絵を2、3枚見せて気付いたことを話し合わせ、見る人に感動を与える絵にするにはどうすればよいかと投げ掛けました。すると、生徒から多様な意見が出て、互いに想像力や意欲を刺激し合えるのです。

授業では、生徒自身が気付いていない良さを見付け、価値付けることに力を入れました。生徒の発言や描いた絵はどこがどう素晴らしいのか、機を逃さずに伝えるようにしました。美術は自らの内なるものを表現する教科です。作品を生み出すのは自分自身であり、それは友だちと違って当然です。制作や話し合いを通して、他者との違いに気付き、自分も友だちも認める大切さを実感してほしいという思いもありました。

校長になった今は、特に若手の先生にそれぞれの良さを伝えるようにしています。山路先生が私を見てくださったように、一人ひとりをしっかり見ようと心掛けています。私が

人生の指標としている言葉に「思い立って取り組んで、出来ていることを確認して、更に励む」という言葉があります。出来たところを見つけて、更に伸ばそうと頑張る。駄目なところを見つけて穴埋めするよりも前向きになり、頑張ろうと思えるからです。

山路先生は人と人との結び付きをとても大切にされていました。山路先生を見習い、私も展覧会の世話役などを積極的に受けるようにしています。2011年3月で定年退職を迎えましたが、私が山路先生と出会えたように、今度は自分が出会う場をつくっていききたい。学校外での出会うの場を広げることで、先生方が専門性を高め、指導力を高める手助けをしたいと思うからです。そのためにも、これからも作品を作り続け、美術という自分の専門分野に磨きをかけていきたいと思っています。



白杵先生は、今もほぼ1日1枚のペースで野菜や花など身近なものを水彩画に描いている。「もっと感性を高めたい」という思いが、忙しい合間にも描き続けられる原動力だという

「授業」で生徒を、学級を伸ばす 第1回

中学校教育の 不易と流行

中学校は、戦後から一貫して、

3年間の後期義務教育を担う重要な役割を果たしてきた。

いかに社会が変化しようとも、今後の中学校教育において

大切に続けたいことは何か。それを守るために

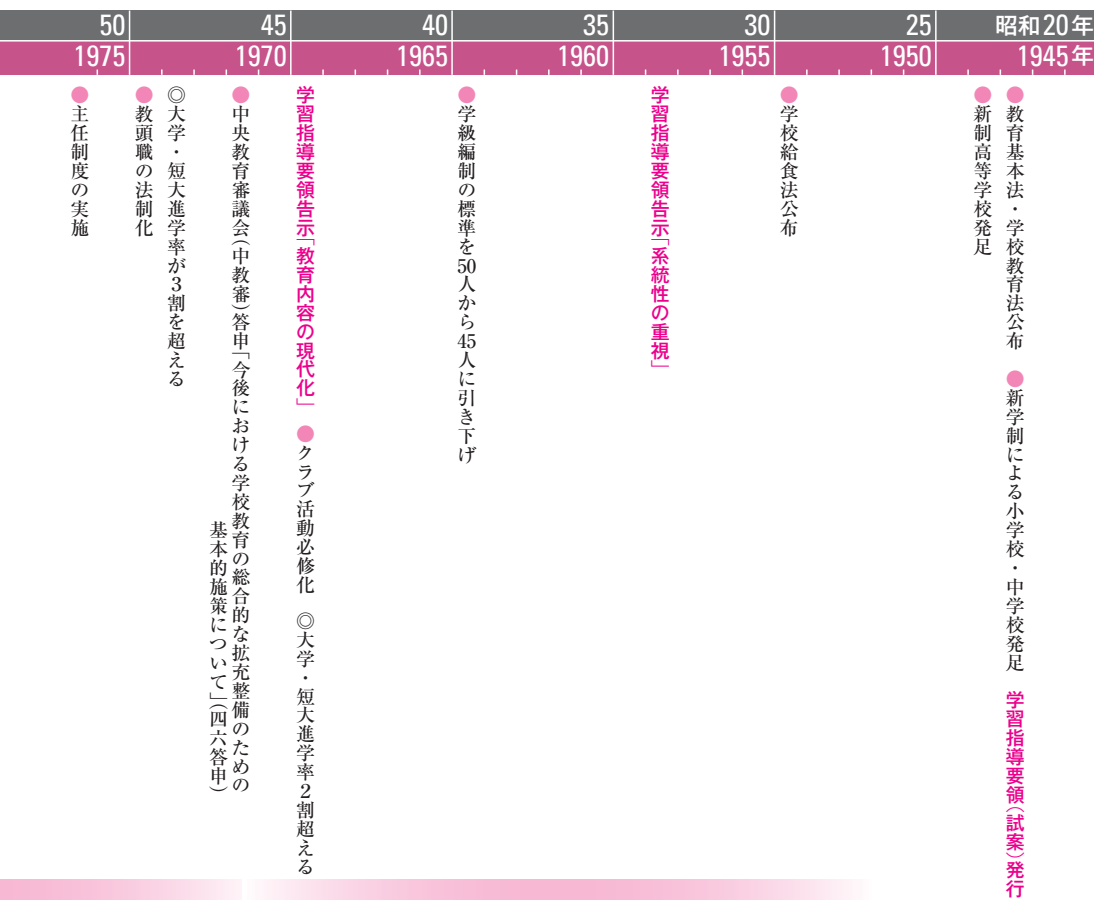
どのような視点で変化を受け止め、進んでいけばよいのか。

校長先生の対談と学校の取り組み事例から考える。



中学校教育の歩み

1947(昭和22)年に「6・3制」の新学制が実施されてから2011年度で64年を迎えた。中学校教育の変化を、主な出来事と統計データからまとめた。



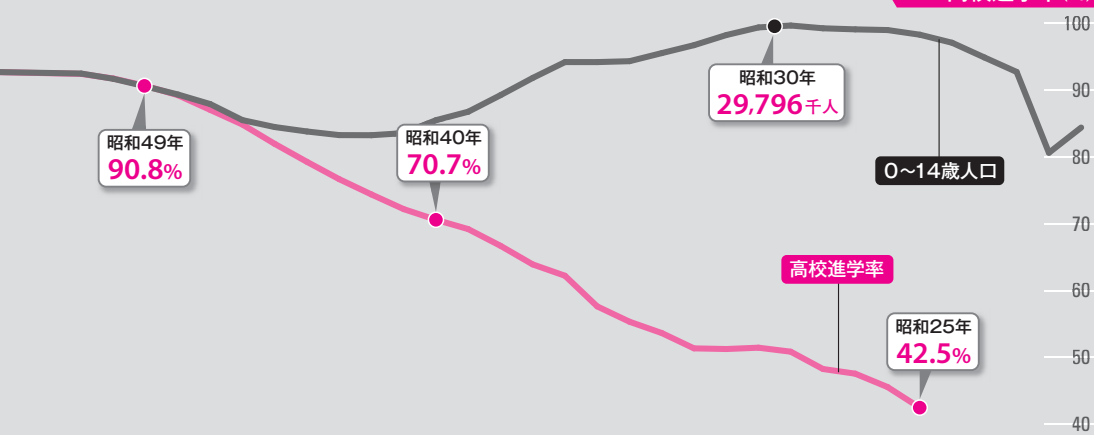
経済成長に対応した教育の量的拡大

産業経済の発展、所得水準の上昇により、教育に対する国民の熱意が強まる

3年間の授業時数



高校進学率(%)



参考文献

- ◎文部科学省「学校基本調査」「学制百年史」「学制百二十年史」「わが国の教育の現状」「わが国の教育水準」「中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 第4期第3回資料」「生徒指導上の諸問題の現状について(概要)」
- ◎教育情報ナショナルセンター(国立教育政策研究所教育研究情報センター)「過去の学習指導要領」
- ◎全日本中学校長会「中学校教育六十年」
- ◎Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」
- ◎国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」「人口統計資料集」

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行

30	25	20	15	10	5	平成元年	60	55
2020	2015	2010	2005	2000	1995	1990	1985	1980
<ul style="list-style-type: none"> ◎新学習指導要領で6年間学んだ児童が中学1年生に 	<ul style="list-style-type: none"> ◎新学習指導要領施行 ●全国学力・学習状況調査(理科を追加) ●PISA2012 	<ul style="list-style-type: none"> ●国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)2011 ●全国学力・学習状況調査(抽出調査に変更) ●PISA2009 ◎携帯電話所持率男子44%、女子56% ●学習指導要領「生きる力」 ●国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)2007結果発表 	<ul style="list-style-type: none"> ●教育基本法改正 ●PISA2006 ●教育再生会議設置 ●教育三法改正 ●全国学力・学習状況調査(悉皆調査) ●学習指導要領「生きる力」 ●国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)2007結果発表 	<ul style="list-style-type: none"> ◎大学・短大進学率が5割を超える ●国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)2003結果発表 ●PISA2003 ●国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)2003結果発表 ●教育基本法改正 ●PISA2006 ●教育再生会議設置 ●教育三法改正 ●全国学力・学習状況調査(悉皆調査) ●学習指導要領「生きる力」 ●国際数学・理科教育動向調査(TIMSS)2007結果発表 	<ul style="list-style-type: none"> ●21世紀教育新生プラン(レインボープラン) ●確かな学力の向上のための2002アピール「学びのすすめ」 ●完全学校週五日制 ●PISA2000 ●教育改革国民会議「教育改革国民会議報告」教育を変える17の提案 ●PISA2000 	<ul style="list-style-type: none"> ●学校週五日制(月2回) ●中教審答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(第1次答申) ●中教審答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(第2次答申) ●学習指導要領「生きる力」 ●部活動、教育課程外に ●中高一貫教育の制度化 	<ul style="list-style-type: none"> ◎「校内暴力」多発(年間3547件) ◎「いじめ」多発(小・中・高校全体の約半数で発生) ◎臨時教育審議会(臨教審)設置 ◎「いじめ」多発(小・中・高校全体の約半数で発生) 	<ul style="list-style-type: none"> ●学級編制の標準を45人から40人に引き下げ ●学習指導要領「ゆとりと充実」

「知の更新」を目指して

知識基盤社会において、国際社会に生きる日本人としての資質・能力の重視。地域・家庭との連携の動き進む

「生きる力」の育成と総合的な学力の重視

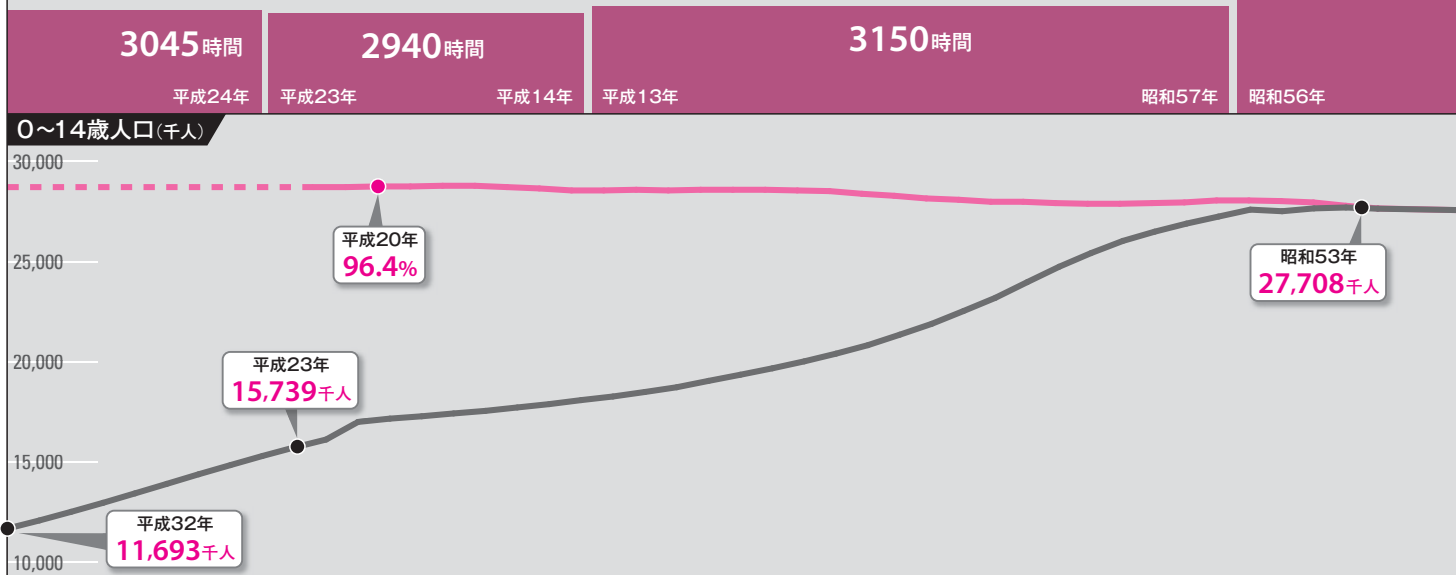
国際化が進む中、公教育への不信感が高まる。確かな学力と豊かな人間性の育成を重視

個性重視と変化への対応

知識集約型産業への転換、地方分権の進展の中、個性重視の原則、生涯学習社会への移行。いじめや不登校の問題が顕在化

安定成長下の教育の質的向上

経済の安定成長期。受験戦争が激化し、校内暴力の問題が顕在化



*2012(平成24)年以降の項目・数値は変更の可能性があります

今、そしてこれからの 中学校教育が担うもの

社会・子ども・教師がどのように変化し、
その中で、中学校は、今後どのような役割を期待されるのか。
全日本中学校長会の新藤久典会長と、全国連合小学校長会の向山行雄会長が、
これからの学校づくりや指導の在り方について意見を交わした。

社会・子どもの変化

重要性を増す「論理的に考え抜く力」

情報化で自己の可能性を
見限る子どもが増加

— 今の子どもを見ていて、近年の社会変化の影響を受けていると感じるのは、特にどのような点ですか。

新藤 今の子どもは、生まれた時からネット社会の中にいます。大量の知識を手軽に得られるが故に、先が見えたような錯覚に陥ってしまうのでしょうか。「頑張ってもろくなことはない」などと、人生や社会を見限っている

ような態度が目立ち、「自分の可能性を信じて追求する」という大切な力が足りないようです。残念なことに、保護者にも「うちの子どもはこの程度だ」と見切りをつけてしまう傾向が見られます。しかし、中学生はまだ十代の初め。これから無限の可能性があるので、教師が子どもの力を信じて伸ばしていく強い気持ちを持つ必要性を痛感します。

向山 情報化により、直接体験が減って間接体験が肥大化していることや、子どもや保護者と教師との情報量の差が一気に縮まったこ

とも大きな変化です。こうした社会や子ども、保護者の変化にいかに対応していくかという視点が、これからの学校教育には求められるのではないのでしょうか。

新藤 例えば、保護者に対しては、かつてのような「学校に任せてください」という姿勢ではなく、「一緒に育てましょう」という協力関係の構築が大切になっていきますよね。また、間接体験が増え、本物とじっくり向き合う体験が減っている影響として、思考を面倒に感じる子どもが増えていると思います。考えるのを早々にやめてしまい、他に正解を求めようとするのです。もっと粘り強く考える力が必要です。更に言うと、自分を信じて、自分は本当はどうなりたいたのか、そのためにどうすれば良いのかを、論理的に考え抜く力がますます重要になると感じています。

こうした力を付けるために、今後、どう指導していけばよいのか。単に知識量を増やしたり、応用問題を繰り返し解かせれば応用力が付くという学力観から抜け出し、子ども自身に考えさせたり、体験させたりする授業に転換する必要があると思います（P.30 教師の指導観参照）。

少子化が進む日本で求められる 「付加価値を生み出す力」

向山 情報化だけでなく、少子化・国際化

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行

全日本中学校長会会長
東京都新宿区立西戸山中学校校長

新藤久典

しんどう・ひさのり◎教職歴35年。東京都公立中学校教諭、東京都東村山市教育委員会指導室長、東京都教育委員会管理主事などを経て現職。モットーは「Never say "can't."」を信じて、まず行動する人になろう」



全国連合小学校長会会長
東京都中央区立泰明小学校校長

向山行雄

むこうやま・ゆきお◎教職歴37年。東京都公立小学校教諭、東京都文京区教育委員会指導主事、東京都教育庁指導部指導企画課指導主事、東京都品川区教育委員会指導課長などを経て現職。モットーは「志を高く掲げて、力強く前進しよう」

も進みます。その中で、**これからの時代を生き抜く日本人に求められる学力**（P. 11 図

① 将来の社会を生き抜く学力）を考え続けることが重要だと思えます。では、それはどのような学力なのか。現在、小・中学校には約1000万人が在籍していますが、10年後には約900万人になるという推計もあります（P. 28 今後10年の児童・生徒数の予測参照）。

単純に考えても、現在よりも一割増の力を付けなければ、日本は生産力を維持できません。中・長期的に考えると、付加価値を生み出す力、言い換えれば、基礎・基本をしっかりと習得した上で、それを活用する力をいかに育てるかが重要な課題になりそうです。「知の更新」と言ってもよいかもしれません。

新藤 おっしゃる通り、社会で求められるさまざまな力を子どもに付けることが学校の役割です。ところが、これまでの中学校教育は、教科学力の保障にばかり目が向きがちでした。進路実績を気にする保護者の視線などがあり、従来の学校経営はテストの結果に一喜一憂する「守り」の面がありました。しかし最近では、高い意識を持ち、行動に移す校長に出会うことが増えました。進路実績など表面的な学力を問題にするのではなく、学校の置かれた状況を把握し、地域の教育資源を生かしながら、独自の学校経営に取り組み動きが出てきたと思います。「自分たちで工夫して取り組もう」と考えるようになってきている

のです。学校が主体性を発揮し始め、「攻め」の姿勢に転じつつあるのかもしれない。

向山 ここ2、3年で社会の潮流が変わり、長らく続いた「学校バッシング」と言えるような状況が収まってきたと感じます。その変化を受けて、学校が受け身ではなく主体的になっているのではないのでしょうか。

「24時間教師」への抵抗感 「待てない指導」が増えた

——先生方の様子で変化を感じられることはありませんか。

新藤 教師全体の傾向としてやや気になることがあります。例えば、子どもの間で流行している事象について、一昔前までは、教師は自分で調べたり聞いたりして、ある程度は把握していました。ところが最近では、携帯電話やインターネット上の問題について知識がいまばかりか、関心すら持たない教師がいるようです。子どもに浸透している文化の知識や理解がないまま指導だけしては、問題の解決につながりません。情報化社会の難しさがあるのは確かですが、「教師は子どもの社会を少しでも知っておくべき」という考えが失われつつあるのは問題だと感じます。

向山 新採の離職率の高さも気になります。これは、我々の育て方に問題があるという反省もあります。若い先生方の価値観の変化

*プロフィールは取材時(2011年3月)のものです

と無関係ではなさそうです。教師は帰宅後も休日も、自宅に電話がかかってくる場合があります。「24時間、教師である」という覚悟がなければ続けられる仕事ではありません。若い先生方には、その覚悟が十分ではないと感じられることがあります。

新藤 私たちの若手時代に比べて、今の若い先生方は優秀だと思います。ところが、授業が上手で人間的にも素晴らしい先生が、突然、辞めてしまうことがあります。早々に自分に見切りをつけてしまうんですね。

また、他の先生の授業や学級経営を見て、良い面を盗むという発想も弱くなりました。

中学校の役割

当たり前前のごとを当たり前前にやる

奇をてらわずに地域の資源を生かした「学校ブランド」を築く

——学校を取り巻くさまざまな変化がある中で、義務教育を担う立場にある中学校は、どのような役割を果たしていくべきでしょうか。

向山 義務教育に限らず、すべての学校の役割は「今の充実」「将来への備え」の二つにあると思います。時代によってどちらに重点を置くのかは異なりますが、この二つは今後

授業を参観する機会を設けても「私には出来ません」と言う。それは当たり前前で、10年後に出来るようになるために、今すべきことを考えてほしいのです。加えて、これは若手・ベテランを問わず、生徒を「待てない」指導が増えている点も気がかりです。教師の多忙化や教師自身がすぐに答えを得ようとする傾向があるのか、生徒の思考を待たずに、すぐ正解を教え込んでしまいがちです。

ただ、これらの変化を「昔は良かった」と考えるだけでは前進できません。時に外部の力を活用しながら、学校全体で指導力を高める努力と工夫が求められるでしょう。

も学校経営の不易であり続けるでしょう。一方、学校は社会の変化に合わせて変わっていかなくてはならない面もあります。これからの公立小・中学校は、地域社会の特性に目を向けて「**学校ブランド**」を構築し、**各校の良さを生み出し、校内外に発信していく姿勢**

長く繁栄していくのです。
新藤 小・中学校は義務教育だからといって、あぐらをかいてはいけません。子どもたちに「この学校で学びたい」と思ってもらえるかを常に問う姿勢が、学校のブランドづくりにつながり、義務教育が更に充実するのではないのでしょうか。

(P.11図②**学校ブランドの構築**)が求められると思います。私は、学校経営は老舗の経営と似ていると思います。伝統を守るだけでなく、社会の新しいニーズを取り入れながら信頼を守り続けていくからこそ、老舗として

向山 そうですね。ここで言うブランドという言葉は、10年ほど前、改訂学習指導要領のキーワードとして流行した「特色ある学校づくり」とは異なります。予算を注ぎ込んで奇をてらった「特色」をつくるのではなく、その学校ならではの**方法で地域の資源を活用し、学校を活性化するという意味合い**です。文化や伝統、人材、生産物など、さまざまな資源に目を向けて教育に生かしてほしいと考えています。

新藤 奇をてらった取り組みは、決して長続きしませんでした。当たり前前のごとを当たり前前にやり続けることが、本来の義務教育の役割であることを忘れてはならないと思います。その姿勢が学校としての強みを生み出し、ひいては揺るぎない学校文化につながると信じています。

向山 義務教育では、原則として子どもは学校を選べません。それぞれの学校が特色にこだわらるあまり、教育内容が他校とは全く異なってしまうのは問題だということも、頭に置いておくべきです。



**校長は学校づくりの道筋を示し
校内で共通の目標を持つ**

新藤 学校づくりを進める上では、**校長のビジョンとリーダーシップが鍵を握る**（P.11

図④校長の率先垂範）と思います。これがしっかりしていない中学校は、たいてい生徒が荒れるようになります。校長は、先生方が校内で率直に意見を言える雰囲気をつくり、皆で

学校づくりに取り組んでいこうという姿勢を持つことが重要です。

向山 同感です。私は校長会などの場で「志を高く掲げ、力強く前進しよう」と言い続けてきました。校長は、志に基づいた学校づくりのビジョン、その実現のための道筋を示し、更にもその過程で浮上する課題を皆で解決していくことが大切だと考えています。

新藤 校長を中心に教師が共通の目標を持つことは重要です。中学校が陥りやすい傾向の一つに、学校が荒れてくると、生徒指導に追われて共通の目標を見失ってしまうケースがあります。目の前の生徒指導に追われる毎日に疲弊してしまい、教員組織がばらばらになってしまうのです。そういう時こそ、改めて目標を示し、学校全体で共有することも、校長の大切な役割だと思います。また、一人ひとりの教師は個性や能力が異なりますから、多様なアプローチを認めると共に、若い教師の持つ力を生かすという視点も必要ではないでしょうか。

向山 校長の仕事とは、オーケストラの指揮者のように、個性的な「楽器」を上手に束ねていく仕事ではないかと思っています。

新藤 確かに。ただ、小規模校では、一人の不協和音の影響が非常に大きく、なかなかまとまらない場合もあるようです。小規模校には、一人ひとりの教師が多くの役割を担い、負荷がかかりすぎるといふ課題もあります。

授業に集中する余裕がなく、大学院まで出ている新採の先生などが「何のために学んできたのだろうか」と、目標を見失うこともあるようです。そうした学校では、教師の役割分担を改めて見直す必要があるでしょう（P.29）
29 4 一日の残業時間、持ち帰り時間参照。

**生徒指導中心ではなく
まず授業で勝負する**

向山 今後、世代交代が進み、若手の先生方が急速に増えていくことも、小・中学校共通の課題となりそうです（P.28）
2 公立中学校の年齢別教員数参照。

新藤 そうですね。長年、新採の先生が赴任しなかったため、いつの間にか校内に新採を育てるシステムがなくなり、今、若手の先生が来ても育てられないという学校が増えました。そうした背景もあり、東京都では、08年度に人材育成の基本方針とともにOJTのガイドラインが出されました。

向山 日本の教師の指導力は世界のトップレベルにあり、昔に比べて少しも劣っていないと、私は思います。しかし、新学習指導要領によって授業内容や時数がこれだけ増えるのですから、大きな壁にぶつかるのではないかと心配しています（P.31）
7 新学習指導要領への不安参照。

私は授業の上達には三つの方法しかないと

思っています。「他人の授業を見て学ぶ」「自分の授業を見て批評をもらう」、そして「自分で自分の授業を記録して分析する」です。全国の小・中学校には、この努力を積み重ねていただきたいと思います。多忙であっても、いかに授業研究の時間を捻出するかは大事な視点です（P. 30 6年間の校内研修実施回数参照）。

新藤 教師にとって、授業力の向上は絶対に

新教育課程の全面实施の前に

教師が夢を語り、夢を語る生徒を育てる

生徒を伸ばすための具体的な目標と方法を示す

——これからの中学校教育で、特に意識すべきことは何でしょう。

向山 新教育課程の全面实施により、授業内容や時数が大幅に増えたカリキュラムで学んだ子どもが中学校に進学していきます（P. 31 8新教育課程で予想される教育内容参照）。

習得と活用を中心とした学習が、中学校でどれくらい花開くかをPISA調査の結果から分析したり、その反作用としての問題行動がどれくらい増加するかを検証したりすることが、義務教育の今後を考える軸の一つになるでしょう（P. 29 3OECD生徒の学習到達

度調査の結果推移参照）。
新藤 小学校で身に付けた力を、中学校がいかにつまみこんでいくか。義務教育全体で子どもを育てるといふ視点がより重要になります。私は、夢を語る生徒を育てるといふ視点も大切にしたいと思っています。子どもは教師を通して世の中を見ていきますから、教師自身が夢を語る人間でなくてはなりません。しかし、精神論だけではだめです。「きみなら出来る。先生についてきてごらん」と上を向かせ、「ここまで到達しよう」という具体的な目標と「どうすれば到達できるか」というやり方も示さなくてはなりません。

向山 教師が一つひとつのことに対して、今までより少しの努力を増すだけでも、学校は大きく変わるのではないのでしょうか。当たり前のことを今より少し丁寧にすればよいと思います。まずは、校長自身が率先垂範して、先生方に示すことが肝要かと思えます。
新藤 私は、朝礼では「Never say "can't."」を年間テーマとして、毎回、生徒の心に訴える資料を配り、話しかけることにしています。その話は、実は教職員の心にも訴える内容となるように工夫しています。また、生徒会の役員との懇談会を開き、生徒の提案を積極的に受け入れるように心がけています。そうすると、子どもを主体として学校を変えていくという雰囲気は校内に生まれていくのです。また、保護者から強い要望があった時、建設的な話し合いで解決できそうなら先生方に任せますが、そうでない場合は全て私が対応するように徹底しています。そのように管理職としての姿勢と覚悟を明確に示さなければ、先生方はなかなかついてきません。

小学校との相互理解を深め「教師の中1ギャップ」を解消

——今後、更に広がると思われる小中接続に関して、ご提案をお聞かせください。

向山 中学校の理科の授業を見学した際、先生が小学校で習う顕微鏡の使用法を長々と説明している姿を見て、特に小・中学校のカリキュラムの相互理解（P. 11 図5小中連

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行

携）が不可欠と感じました。中学校の教科担任制についていけないことも、いわゆる中1ギャップの要因です。そうした制度面の接続の在り方も考える必要があるでしょう。

新藤 反省を踏まえて言うと、中学校では教師側に「中1ギャップ」があると云わざるを得ません。中学校では3年生を受け持った翌年に1年生の担任をすることがよくあります。すると、1年生の能力を低く評価し、小学校で立派に出来たことも出来ないようにしてしまうのです。例えば、小学生の時は出来ていた給食の準備などが、中学校に入ってからなくなる場合があります。これは中学校の指導の課題ですね。小6生と中1生の教師がもつと交流し、子どもへの理解を深める必要性を感じています。

向山 教育の検証には20年が掛かるとよく言われるように、小中接続の効果や課題はまだ明らかではありません。問題行動の発現率など短期間で測定可能なデータを参考にしつつ、自校の実態に合った形を模索すべきではないでしょうか。

新藤 小学校で学んだ内容を土台として適切に活用することで、これまで以上に高い目標を設定して子どもを伸ばせる可能性がります。そのために、小学校の授業の見学や人事交流など、出来ることから小中接続を取り入れる姿勢も大事だと思います。

——本日はありがとうございました。

これからの中学校教育を考える5つのキーワード

変化・課題

社会

- ・2020年までに小・中学生の人口は1割減
- ・情報化・国際化の進展
- ・人間関係の希薄化
- ・就職内定率の低下、フリーターの増加

子ども

- ・直接体験の減少、間接体験の肥大化
- ・コミュニケーション力の低下
- ・将来の夢を見いだせない傾向の強まり

保護者

- ・団塊ジュニア世代が生徒の保護者の中心に
- ・子どもの力に見切りをつける傾向

中学校教師

- ・新学習指導要領の全面实施
- ・教師の急速な世代交代
- ・多忙化、多忙感が増大
- ・学校の小規模化
- ・教師と子ども・保護者の知識量の差が縮小

1 将来の社会を生き抜く学力の育成

- ・論理的に考え抜き、可能性を追究し、夢を語る事が出来る力
- ・少子化・国際化社会において、付加価値を生み出す力
- ・高校受験だけを目的としない、基礎・基本を習得し、それを活用する力

2 揺るぎない学校ブランドの構築

- ・伝統を守りつつ、社会の新しいニーズを取り入れる
- ・地域の資源を取り入れながら、学校を活性化して特色をつくる
- ・「この学校で学びたい」と子どもに思ってもらえる学校を目指す

3 生徒に力をつける授業づくり

- ・「本物との出会い」を重視した授業
- ・今の学びと社会とのつながりを意識した授業
- ・回り道に思えても、生徒を「待つ」指導

4 教師集団を引っ張る校長の率先垂範

- ・長期にわたりぶれない目標掲げて、教師間で共有する
- ・目標実現のための道筋を示す
- ・教師の「とりで」となる

5 義務教育強化のための小中連携

- ・教師の「中1ギャップ」の解消
- ・9年間で子どもを育てる視点
- ・出来ることから少しずつ交流を深める

不易 「今の充実」と「将来の備え」を図る教育、奇をてらわず当たり前取り組みを実践する教育

次ページからは上記のキーワードを具体的にイメージするために、3校の事例を紹介する。いずれも奇をてらった取り組みではなく、校長が主導しながら、置かれた状況に応じてより良い学校づくりを目指している

50年続く「バズ学習」を基盤に 集団の力で学力向上を図る

岐阜県 土岐市立泉中学校

授業で、清掃で、学活で――。土岐市立泉中学校は、約50年にわたり、学校生活のさまざまな場面で「バズ学習」を実践してきた。

進取の精神を大切に、生徒の気質や教育環境の変化に応じて、学校としての「不易」を守り続けている。

▼泉中学校に見る▼不易

人間関係づくりを基盤とする学力向上

あらゆる活動に

「バズ」を取り入れる

土岐市立泉中学校では、給食後の15分間に清掃活動を行う。4〜5人の生活班単位で、教室や廊下などそれぞれ割り当てられた場所を掃除するのだが、初めに「開始バズ」と呼ばれる、次のようなやりとりが行われる。

「掃除中の私語が多くなっているので、静かに掃除をしましょう」

「時間いっぱい、きちんと掃除しましょう」

「気付いたことがあれば、他の人の役割も手伝いましょう」

班長が進行役となり、その日の掃除の目標や班員の分担をてきぱきと確認してから掃除を行う。そして終了の放送が流れ始めると、掃除道具をしまい、同じように班長が進行役となり「終了バズ」を行う。ここでは、一人ひとり反省点を述べ、班員の良かった点も言い合う（写真1）。

学活にも、「バズ」が取り入れられている。例えば、学級で何か問題が起きた時、学級委



School Data

◎1947（昭和22）年開校。岐阜県の東濃地区を対象にした研修校。98年度からは岐阜大教育学部の教育実習協力校。「めあてづくり・自分づくり・仲間づくり」の精神を基盤にした教育を展開する。

校長◎桐井雅康先生

生徒数◎540人 学級数◎17学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒509-5132 岐阜県土岐市泉町大富1635-1

TEL◎0572-54-2295

URL◎<http://www.ed.city.toki.gifu.jp/izumichu/>

公開研究会◎未定



土岐市立泉中学校校長

桐井雅康

Kiri Masayasu

「向こう10年間、通用する教育をつくるため、ベテランこそ青臭い夢を語り、エネルギーを見せたい」

員の投げかけによって、生活班で今後、どうすればよいかを話し合い、クラス全体で発表する。また、学期の終盤や大きな行事が終わった後にも「バズ」を行い、良かった点や反省点を出し合って、次への目標を立てている（写真2）。

このように、泉中学校では学校生活のあらゆる場面で「バズ（Buzz）」を行っている。これは、「バズセッション」という話し合い

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行

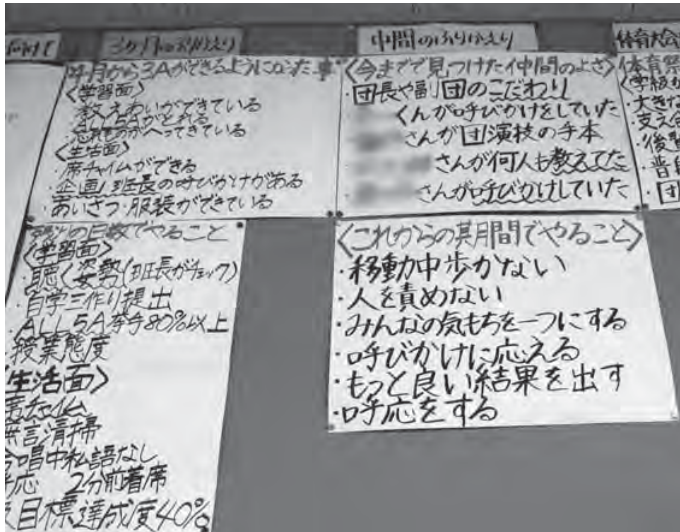


写真2 教室の後ろの壁には、クラスで時期ごとに振り返った内容を模造紙に書き、掲示している。これは学活での「バズ」で出てきた発言をまとめたものだ

「友だちに『ここが分からない』と安心して質問でき、質問された生徒が『何が分からないの?』と聞き返す。あるいは、友だちの発言に対して『それは違うと思う』と気兼ねなく指摘できる。そのような人間関係が出来てはじめて、授業での学びが深まり、一人ひとりの思考力や学力が高まっていくはずです。その上で、生徒から『先生、話し合わせて!』と声がかかるような授業を行えば、学びの質は更に高まるでしょう。単にグループ

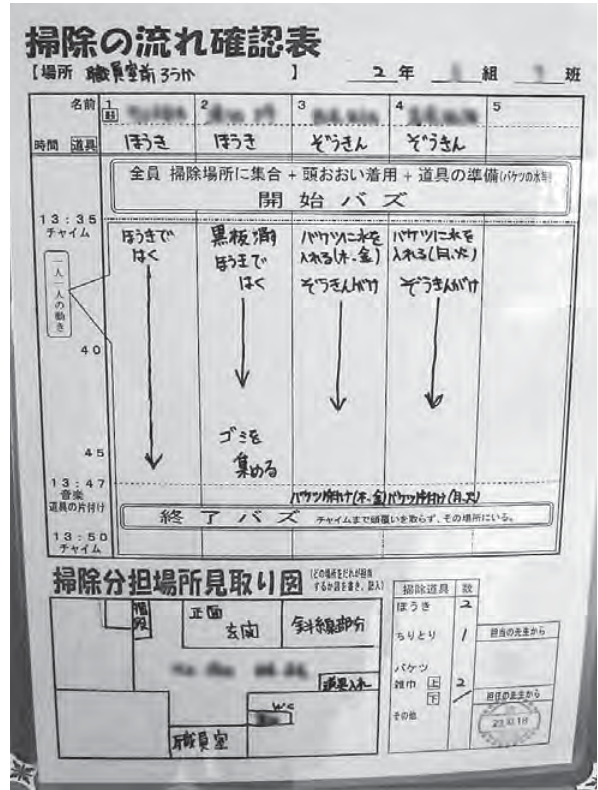


写真1 廊下の掃除用具入れに貼られた「掃除の流れ確認表」。「開始バズ」から「終了バズ」までの一人ひとりの動きを示している

の一形式のことだ。1グループ6人で6分間行うケースが多いことから「六六式討議」、また「バズ」がハチがぶんぶんざわめくことを意味するため「ぶんぶん討議」とも呼ばれている。同校は、このような人間関係づくりを基盤とする「バズ学習」を、50年近くにわたって発展させてきた(*)。桐井雅康校長は、その意義を次のように説明する。

個人↓グループ→全体へ 段階を追って「バズ」を起こす

授業には、どのように「バズ学習」を取り入れているのだろうか。桐井校長が先頭に立って作成した「バズ学習」の流れと指導のポイントを見てみよう(P.14図1)。

①「個人内バズ」を起こす

まず事象を提示し、生徒に既習事項との「ずれ」を認識させる。「なぜ?」「どうして?」という驚きや発見、感動、すなわち「心のざわめき」が生まれるきっかけとなるからだ。驚きや発見などが自然と出てくるような課題を、教師がいかに設定できるかが重要となる。

②「ペア・グループバズ」を行う

協同学習ともいわれる活動で、ペアもしくはグループで自分の考えや方法を説明し、他のメンバーの考えや方法を学ぶ。

③「全体バズ」への移行

各グループの意見を持ち寄って学級全体で話し合い、自分の考えを深めていく。他の意見や考えを聞き、賛否や疑問について話し合いを深めていく。

*バズ学習については、同校のウェブサイト「泉中学校 特色」で詳しい解説がご覧いただけます。<http://www.ed.city.toki.gifu.jp/izumichu/>

このような授業を行うことによって、「もっと知りたい」「他の方法はないか」と生徒の自主的な学習を促すことが、同校の目指す学びの姿だ。

『バズ学習』を授業に位置づけるとどうなるのか。先生方が具体的にイメージできるように、教科の特性や単元に応じて『習得系』と『活用・探究系』の2パターンの授業モデルをつくりました(図2)。教科や題材、その授業の位置付けによって、『バズ学習』の取り入れ方は異なります。単元の導入で生徒にインパクトを与えるためにはどうすればよいか、単元の終わりにまとめとして行うにはどうすればよいか。それぞれに合わせて『バズ学習』を取り入れることが大切です(桐井校長)

「バズ学習」が学校の荒れを収めやがて学校の看板に

同校が「バズ学習」を始めたのは1962年のことだ。同校は荒れの最中にあり、生徒の人間関係の土台づくりを促す手立てとして取り入れられたという。これが大きな成果を出し、学校は落ち着いていったため、その後「バズ学習」は教育活動の中核となっていた。33年前、初任で同校に赴任した桐井校長は、当時から次のように振り返る。

「私は『バズ学習』のことを何も知らず、

図1 「バズ学習」の流れと指導のポイント

生徒への投げかけ		指導のポイント
事象との対面 <ul style="list-style-type: none"> あれえ? なんで? すごい! どうやった? みつけた! うーむ? 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒から自然発生的に課題につながる疑問が起こる事象提示が望ましい 教師から、「～を工夫して～しよう」の形で提示する習熟的課題と「～は～であることを証明せよ。～を使って解け」のように既習の応用型課題と生徒の疑問を「～となるのはどうしてか」とくり直す活用探究型課題などの課題類型が、教科や単元等によって考えられる 	<ul style="list-style-type: none"> 既出の知識・常識・予想と「ずれ」る事象との対面 驚き、発見、感動、憧れの起きる事象との対面の工夫
課題の成立 <ul style="list-style-type: none"> なぜ、どうして? 理由は何だ? どうすればいいか 		<ul style="list-style-type: none"> 個性差、能力差に対応する手立ての準備(要援助生徒の学習への対応) 本時(本単元)、誰を、どんな理由で、どのように揺さぶりたいのか
個人内バズ <ul style="list-style-type: none"> もしかしたら きつこうやれば たぶん違くない 根拠をもって仲間に言えるように自分の考えをまとめる(似た体験はないか、何を調べればよいか) 自問自答して考えを練る(本当にそうか、どうしてそういえるのか、どの資料からそういえるのか) 	<ul style="list-style-type: none"> この結果から本当にそういえるのか 違う方法でも同じ結論が出るか 発想や視点を変えたときどうなるか みんなはそう言うが、先生はちがう これについては～という考えもあるかどうか こっちの資料ではどうなのか 	<ul style="list-style-type: none"> 仮説、具体的追究方法の見通し どういう結論が出ればよいか
グループバズ <ul style="list-style-type: none"> 僕はこう思うが、君はどう思う、ならばこうしてみよう どこまで分かり、どこが分からないかを明らかにする 誰が、どこで、何をし、注意は何で、どういう結果を求めるためにするのか 		<ul style="list-style-type: none"> 質問・付け足し・反論・補足 複数案も可。無理矢理一つに結論づけられない 曖昧なままに進めない
探究・検証活動 <ul style="list-style-type: none"> 何がどうなればそうだとはいえるのか 誤差はどこに原因があるか 他の理由・考えはできないか 違う考えや方法をしている人をどう考えるか なぜそう考えるか、理由をもっと聞きたい 私には何か腑に落ちないがみんなはどうか 〇〇さんとちがって、〇〇さんとよく似ていて、〇〇さんに聞きたいけど、ということは…(思考を深める話形の指導) 	<ul style="list-style-type: none"> 他でも通用するか 日常ではどこに使われているか 別の確かめ方、考え方はないか 過去に習ったこととどうつながるか なんだかよく分からん 	<ul style="list-style-type: none"> 実験結果・教科書表記・人の意見を簡単に認めさせない(疑い、拘り、発展させる姿を重視) 座席表・個人メモの活用 複線・副案を持った指導 「ゆさぶり」「やま」のある指導(単元指導)
後を引く終末 <ul style="list-style-type: none"> 他でも通用するか 日常ではどこに使われているか 別の確かめ方、考え方はないか 過去に習ったこととどうつながるか なんだかよく分からん 	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇さんの意見がすごかった。〇〇さんの意見で深まった 家に帰って調べたい よいことだと分かるが自分にできるだろうか ここを直して、再挑戦したい 	<ul style="list-style-type: none"> 強引にまとめない。次の時間に思いがつながる終わらせ方の工夫

*同校の資料を基に編集部で作成

とにかく関連する本をたくさん読んで勉強し、先輩方から言われたことに精一杯、取り組みました。当時は全国的に『バズ学習』が

広まり始めた頃で、最新の教育活動を取り入れているという自負もあったと思います」
同校は76年、89年、2000年と、全国バ

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行

「目先の生徒指導に追われた時期もありましたが、『仲間と共に頑張りたい』という生徒の気持ちに答え、より良い集団をつくりながら学習を進めるためには『バズ学習』しかないという思いが、どの時代でも教師の間にあったからだと思います。学校の荒れに対しては、学級経営を重視した活動の見直しを行い、活動が形骸化しつつあった時は生徒会活動の活性化を通じて立て直すという具合に、その都度、『バズ学習』の重点や意義を見直してきたのです」(桐井校長)

ズ学習研究大会の会場校になったこともあり、「バズ学習の学校」というイメージが定着していった。

しかし、長らく続けられてきた同校の「バズ学習」の歩みは、決して平坦だったわけではない。例えば、全国的に中学校の荒れが顕在化していた1970年代末〜80年代頃には、仲間や教師から1日の行動を細かく規定されがちな「バズ学習」に対して生徒の抵抗感が強まり、学校が落ち着きを失ったことがあった。また、ここ10年ほどは、「バズ」の方法論のみが踏襲され、肝心の生徒の自主性を伸ばせていないのではないかとという反省が校内で論議されていた。

しかし、それでも同校は「バズ学習」をやめるのではなく、その時々状況に応じて、その在り方を見直し、伝統を守る道を選んできた。

図2 「バズ学習」取り入れた授業モデル

	家庭学習	本時の授業					家庭学習	
	準備する(個人)	教わる(教師)	試す(個人)	理解を確認(班)	思考する(教師・友)	深め合う(個人→班→学級)	習得を確認(個・班・教師)	修練する(個人)
習得系授業	<ul style="list-style-type: none"> ●教科書を読み疑問や概要をつかむ ●資料や材料を集める ●新出の語句の意味を調べる 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時学習する知識技術を教わる ●本時の課題追究に必要なとなる既習の知識技術を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ●練習問題を解いて理解を確かめる ●自分の疑問や考えをまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間に自分の考えや方法を説明する ●仲間の考えや方法を教え学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時学んだ知識技能をどう使うと解決できるか ●解決の手がかりとなる情報はどこにあるか 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間の考えに質問や意見することで自分の考えを深化する ●仲間と知恵を出し合うことで、新しい方法や追究課題を発見する ●改善し繰り返し練習する 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時分かったこと出来たこと ●まだ分からないこと ●さらに追究したいこと 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時覚えなくてはいけないこと ●もっと自分で調べたいこと
評価	<ul style="list-style-type: none"> ▲一次自己理解度評価 *4回分ほどの自己評価欄の評価表 	<ul style="list-style-type: none"> ▲事前理解度の挙手確認 ▲二次自己理解度評価 *挙手による理解度変化評価 		<ul style="list-style-type: none"> ▲三次自己理解度評価 *挙手による理解度変化評価 			<ul style="list-style-type: none"> ▲最終自己理解度評価 *挙手で確認。感想記入 	<ul style="list-style-type: none"> 確認問題プリント *疑問、まだ分からないことの記入
活用・探究系導入	家庭学習	本時の授業					家庭学習	
	準備する(個人)	課題をつかむ(教師から)	考える(個人)	計画する(班)	深め合う(個人→班→学級)	確認する(個・班・教師)	修練する(個人)	
	<ul style="list-style-type: none"> ●教科書を読み疑問や概要をつかむ ●新出の語句の意味を調べる 	<ul style="list-style-type: none"> ●事象と対面し、追究課題をつかむ ●本時の課題追究に必要なとなる既習の知識・技術を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ●解決の手がかりとなる情報はどこにあるか ●自分の疑問や考えをまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間に自分の考えや方法を説明する ●仲間の考えや方法を教え学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間の考えに質問や意見することで自分の考えを深化する ●予測と結果を確認し改善し再度挑戦する ●仲間と知恵を出し合うことで、新しい方法や追究課題を発見する 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時分かったこと出来たこと ●まだ分からないこと ●さらに追究したいこと 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時覚えなくてはいけないこと ●もっと自分で調べたいこと 	
継続追究	家庭学習	本時の授業					家庭学習	
	準備する(個人)	教わる・学ぶ(教師から)	試す(個人)	確かめる(班)	思考・工夫する(教師から)	練り深め合う(個人→班→学級)	確認する(個・班・教師)	修練する(個人)
	<ul style="list-style-type: none"> ●教科書を読み疑問や概要をつかむ ●資料や材料を集める ●新出の語句の意味を調べる 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時学習する知識技術を教わる ●本時の課題追究に必要なとなる既習の知識技術を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ●練習問題を解いて理解を確かめる ●自分の疑問や考えをまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間に自分の考えや方法を説明する ●仲間の考えや方法を教え学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時学んだ知識技能をどう使うと解決できるか ●解決の手がかりとなる情報はどこにあるか 	<ul style="list-style-type: none"> ●仲間の考えに質問や意見することで自分の考えを深化する ●仲間と知恵を出し合うことで、新しい方法や追究課題を発見する ●改善し繰り返し練習する 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時分かったこと出来たこと ●まだ分からないこと ●さらに追究したいこと 	<ul style="list-style-type: none"> ●本時覚えなくてはいけないこと ●もっと自分で調べたいこと
評価		<ul style="list-style-type: none"> ▲一次自己理解度評価 *4回分ほどの自己評価欄の評価表…挙手確認 		<ul style="list-style-type: none"> ▲二次自己理解度評価 *挙手による理解度変化評価 			<ul style="list-style-type: none"> ▲最終自己理解度評価 *挙手で確認。感想記入 	

*同校の資料を基に編集部で作成

生徒の変化に応じて活動を見直す

**現状に合わせて
形を変えながらも続けていく**

10年度、約25年ぶりに着任した桐井校長は、「バズ学習」の良さを生かし切れていない状況に對峙し、その見直しを打ち出した。

「『バズ学習』の根幹となる人間関係づくりが苦手な生徒が増えていることに課題を感じました。活動内容を見直し、早々に対応しなければと感じたのです」（桐井校長）

先に紹介した授業モデル（P.14図1、P.15図2）は着任早々の5月に示したものだ。同年には、これをアレンジして英語と音楽で研究授業を実施。更に、11年度の研究テーマを「バズ学習」とした。

「本校が目指すのは、一つめに生活の土台となる『学級集団づくり』、二つめにすべての学力層の生徒が個々の能力を高められるような『授業づくり』、そして、三つめは生徒が考えたい、深めたいと思う『仕掛けづくり』です。『バズ学習』によって、この三つを追究できると考えています」（桐井校長）

「バズ学習」の前提としては、生徒一人ひとりの学力把握が重要になる。参加できない生徒がいるような課題設定では、「バズ学習」

は成立しないからだ。同校では入学時に小学校段階の学習内容から作問した小テストに取り組ませ、生徒がどの段階でつまづいているかを把握している。これを少人数の指導や習熟度に応じた宿題にも生かそうとしている。

「よく考えて行動する力を育むための土台となる『読む、書く、話す、計算する力』を教科学習を通して保障し、高校へ、更には社会に送り出すことが、義務教育の責務だと思います」（桐井校長）

「バズ学習」を研究テーマとするに当たり、桐井校長は「学力とは何か？」という学力観を見直す必要性も、教師に投げかけた。

「学力には三つの要素があると、私は考えています。一つめは、課題におつかった時に逃げ出さずに解決に向かっていく意志。二つめは、課題を解決するために必要となる知識や技能です。仮に自分にそれがなくても、どこに求めれば得られるのかを探す力も含まれます。三つめは、チームをつくる力、つまり社会性です。自分一人で出来ることは限られていて、他者の力が必要だからです。このような学力を身に付けさせるためには、生徒が『どうしてそうなるのか』と疑問を持ったり、『やってみたい』と意欲をかき立てられるよ



写真 3年生の数学の授業での「グループバズ」の様子。4～5人の生活班単位で机を向き合わせ、互いに相談しながら学び合う

**生徒同士が助け合い
やり切る体験をさせたい**

うな授業でなければなりません。教師は『何かを解決することは面白い』と思わせるだけの授業を工夫すべきでしょう」（桐井校長）

現在の同校は、深刻な生徒指導上の問題は少ないものの、全ての生徒が落ち着いて授業を受けているわけではない。そこで、11年度中に『生徒指導マップ』を作成する予定だ。

「生徒指導上、どの時期にどのような問題が起きやすいかは、大体分かっています。それを月ごとにまとめた一覧表をつくっておけば、担任は計画性のある学級づくりをしやす

いのではないかと考えています」（桐井校長）

二つめの課題は教師の負担だ。同校は岐阜県東濃地区の教師を対象にした研修校のため、教師は多忙な毎日を送っている。

「新学習指導要領では教える内容が増え、力のある先生でも負荷が増えます。しかし、それでも『バズ学習』のための準備が必要だと考えています。難しい内容でなくてもよいので、生徒同士が助け合って、自分たちでやり切った実感を味わわせる場を設けていきたいと思えます」（桐井校長）

生徒に本気で期待をかける 教師の真価はそこにある

桐井校長には忘れられない出来事がある。約20年前、ある学校で2年生の担任をしていた時のこと。「俺は頭が悪いから高校には行けん。授業は俺には関係ないし、内申書に何を書かれようが怖くない」と言い、授業をきちんと受けようとしないう生徒がいた。桐井校長は、「人をお前を馬鹿だと言ったとしても、『俺はやれば出来るで。今に見ておれ』という気持ちがあれば、いつか出来るようになる。高校へ行こうとする努力もせずに、行けないと決め付けるのは最低だ！」と叱った。すると、翌朝、その生徒が職員室を訪れてきた。「先生、俺でも本当に高校に行ける？」

「行けるかどうかは分からない。決めるの

は高校だから。でも、行くための努力は自分
が出来ることだ」

「やってみるわ」

結局、生徒は高校に進学。成人式の時にその生徒と再会した桐井校長はこう言われた。

「それまで会った先生は、自分がいなければいいのと思っているのが伝わってきた。でも、桐井先生は本気で自分のことを心配して怒ってくれた。先生のこと忘れません」

これが教師としての原点と桐井校長は話す。「生徒には『今は出来なくても、いつか出来るようになる』と折に触れて伝えていきます。

教師の真価は、教える知識や技術が長けていることではありません。どれだけ本気で生徒に期待をかけているか。心からその教科が好きで、生き生きと教えられているか。人が人を変えるのは、そうした姿を見せられるかどうかにかかっていると思うのです」

桐井校長は、目の前の仕事に追われ、先生方の教育への情熱が低下しているのではないかと懸念する。

「優れた教師を育てようと思うならば、上に立つ人間が熱くならなければなりません。まず自身が教育への情熱を見せ、それが他の先生方にじわりと伝わればと思います。気になる生徒がいたら、その生徒を授業に振り向かせるために挑戦する。そのことで教師として大きく成長するのではないのでしょうか」

今年度から「バズ学習」の再構築に向けて

桐井校長が考える教育の不易

私が生徒や先生方に常々話しているのは「たとえ今は能力差があっても、未来もずっとそのままの状態ではない」ということです。今は出来なくても、「これで終わってしまう自分ではない」という意識があれば、どん底に落ちてでも次のステップに進もうとする意欲が湧きます。

社会の変化に応じて打つ手は変えていかなければなりません。しかし、子どもたちが大人になった時、より幸せな生活を送り、より良い日本をつくるための力を育てるという私たちの役目は変わりません。次世代を育てることは、教育者という前に人間としてしなければならないことだと考えています。

泉中学校では新たな挑戦が始められている。桐井校長は、生徒も教師も常に考える集団づくりを目指していると語る。

「『向こう10年間通用する教育方式をつくる』と呼びかけ、私なりの案を出しました。私はそれを否定されても構いません。最も怖いのは受け流されてしまうことです。『自分はどう考える』と意見を出すことが議論を進めるのです。私たち教師も『バズ学習』のような話し合いを重ね、新たな教育活動を生み出していききたいと思えます」（桐井校長）

統合4校が互いに学び合い 新たな学校文化を創造する

長野県 阿智村立阿智中学校

全国的に学校の統廃合が進んでいるが、人も校舎も変わる中で「学校ブランド」をつくることは難しい。2010年度からの2年間で3校と統合する阿智村立阿智中学校は、統合前に授業や学校行事を合同で行い、交流を重ねることで、スムーズな統合と生徒中心の新たな学校づくりを進めている。

▼阿智中学校に見る▼不易

互いを尊重し学び合う生徒・教師

「各校は対等、生徒も対等」を
会議や集会で強調

阿智村立阿智中学校は、2010年度、同村立清内路中学校と統合した。清内路中学校の学区から1年生5人、2年生3人、3年生7人が同校に通っている。教師3人も同校から異動してきた。

11年度には、同村立浪合中学校、隣村の平谷村立平谷中学校とも統合し、2校の学区から計34人の生徒と、両校の教師2人を迎える。

統合に向けて建設していた新校舎も完成する。

阿智中学校と3校の所在地は離れており、車で最大30〜40分もの距離がある（図1）。周辺に鉄道は走っておらず、路線バスも日に数本しか運行していない。そのため、多くの生徒はスクールバスで通学する。定期考査期間中に生徒がスクールバスに乗り遅れた時には、教師が車で迎えに行ったこともあったという。

佐川浩一校長がいずれの統合でも強く心が

School Data

◎1961（昭和36）年開校。
長野県南部、木曾山脈と赤石山脈の間に位置する。2010年度は阿智村立清内路中学校と、11年度は同村立浪合中学校、平谷村立平谷中学校と統合。



校長◎佐川浩一先生

生徒数◎238人 学級数◎10学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒395-0302 長野県下伊那郡阿智村伍和173

TEL◎0265-43-2504

URL◎<http://www.valley.ne.jp/~achi1go/>

公開研究会◎2011年9月13日（火）（予定）



阿智村立阿智中学校校長
佐川浩一 Sawawa Koichi

「何か一つのことに対して、全力で打ち込もうとする生徒を育てたい」

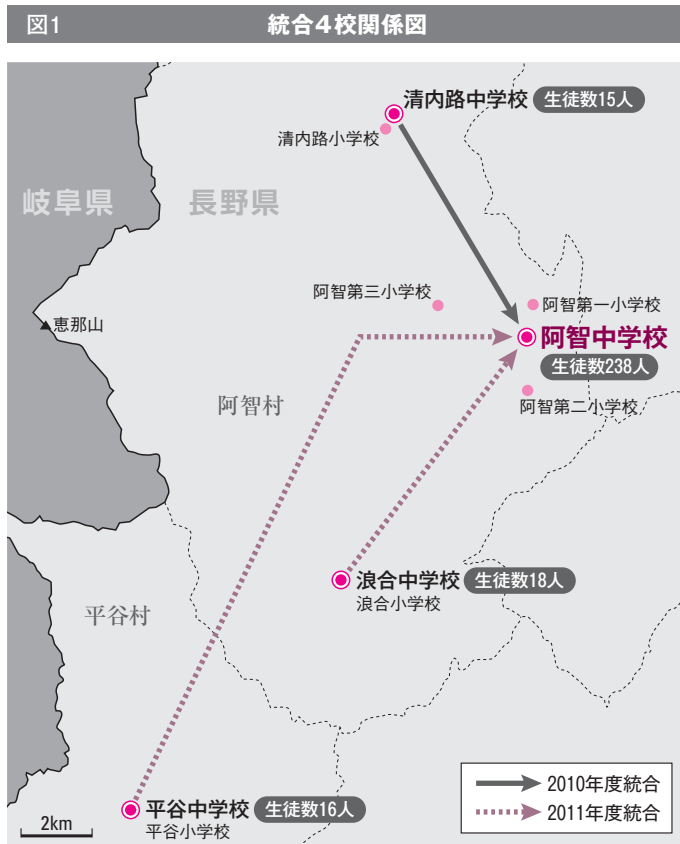
けているのは、生徒同士が対等な関係を築けるようにすることだ。

「生徒数は少なくても、各校にはそれぞれの校風や文化があります。阿智中学校が3校を統合するのではなく、4校が一緒になって新たな学校に生まれ変わるのだと考えています。互いの良さを認め、学び合ってください。よい学習集団になれると、職員会議や全校集会で繰り返し伝えていきます」

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行



* 浪合中学校と浪合小学校、平谷中学校と平谷小学校は、同じ敷地内にある
* 生徒数はそれぞれ統合時の人数

阿智中学校の2年生が一緒に1泊2日で、南アルプス・仙丈ヶ岳に登った(写真1)。ここでも事前準備段階から両校混合で6人1組に分かれた。別々のグループになった清内路中学校の生徒は、最初は見せていたが、阿

智中学校の生徒から積極的に声を掛けられ、次第になじんでいったという。当日は互いに助け合って登る様子が見られた。

◎合同登山(8月)

両校の2年生が一緒に1泊2日

で、南アルプス・仙丈ヶ岳に登った(写真1)。ここでも事前準備段階から両校混合で6人1組に分かれた。

別々のグループになった清内路中学校の生徒は、最初は見せていたが、阿

智中学校の生徒は、最初は見せていたが、阿

智中学校の生徒は、最初は見せていたが、阿

阿智中学校生徒会の会長と副会長2人の計3人が、清内路中学校の生徒集会に出席し、

◎生徒会活動(12月)

阿智中学校生徒会の会長と副会長2人の計3人が、清内路中学校の生徒集会に出席し、

清内路中学校の生徒全員が、阿智中学校が文化祭で行う音楽会に参加。清内路中学校の伝統的な取り組みである合唱を披露した。「本校の生徒は、清内路中学校の生徒が県内外の合唱大会で実績を残していることを知ってはいましたが、実際に聴いて、その歌声の素晴らしさに感動したようです。自然と歓声が上がりました」(佐川校長)

◎文化祭(10月)

清内路中学校の生徒全員が、阿智中学校が文化祭で行う音楽会に参加。清内路中学校の伝統的な取り組みである合唱を披露した。「本校の生徒は、清内路中学校の生徒が県内外の合唱大会で実績を残していることを知ってはいましたが、実際に聴いて、その歌声の素晴らしさに感動したようです。自然と歓声が上がりました」(佐川校長)

事前交流で互いを知り 統合後の人間関係の不安を軽減

清内路中学校との統合に当たり、09年度は4月に両校で計画を立て、次のような事前交流を行った。

◎合同授業(5月)

清内路中学校の1・2年生が阿智中学校を訪れ、同じ授業を1時間一緒に受けた。1年生は体育で、両校の生徒が混合チームを組んでリレーを行い、2年生は2組に分かれ、国語と社会の授業に出席した。生徒と共に来校した学級担任は、それぞれの授業を参観した。

「清内路中学校の生徒は、統合後、それまでの数倍の生徒の中で授業を受けることになり、学習環境が大きく変わります。30人の生徒と一緒に受ける授業がどのようなものかを体験してほしいと考えました」(佐川校長)

◎宿泊体験学習(6月)

両校の1年生が、県立施設で飯ごう炊さんやキャンプなどの野外活動を1泊2日で行った。阿智中学校の生徒73人を12グループに分け、そこに清内路中学校の生徒3人が1人ずつ加わった。役割分担を決める集会や結団式などの事前準備段階から両校混合のグループで行ったことで、当日は両校の生徒が打ち解けて話す様子が見られた。

写真1 6人1組で、標高3,033mの仙丈ヶ岳に登る。あえて阿智中学校と清内路中学校との混合グループにしたことで、生徒同士の交流が盛んになった



自校の生徒会の方針や組織、運営などについて説明。両校の生徒の質疑応答も見られた。

◎修学旅行(3月)

2年生の修学旅行は、見学場所は異なるものの、両校で日程と宿舎を同じにした。

佐川校長は、こうした事前交流の意義を次のように話す。

「清内路中学校の生徒は、統合後の学校生活や、新しい教師、友だちとの人間関係に不安を抱いていたはず。事前に十分交流しておけば、阿智中学校の様子が分かり、安心できます。特に宿泊体験学習や合同登山で寝食を共にしたことは、互いを知る上で大きな収穫があったと思います」

両校混合のグループ編成については、「人数の少ない清内路中学校の生徒が孤立してしまっているのではないか」という理由から反対する声もあった。しかし、統合後は両校の生徒が毎日同じ教室で学ぶことになる。少しでもコミュニケーションの機会を増やそうと、あえて混合グループにしたという。

清内路中学校の良さに学ぼうと 生徒会が合唱コンクールを提案

事前交流の成果は、統合1年目の10年度1学期から、両校の生徒同士が仲良く話したり、学び合ったりする様子に見られた。6月に清内路中学校出身の生徒全員に行ったアンケート

トでは、「学校生活が楽しい」という回答が9割以上を占め、その理由として「友だちがたくさん出来たから」という声が目立った。

「清内路中学校の生徒は、教室でまず事前交流の時に同じグループだった生徒と話すようになり、次第に他のグループの生徒とも仲良くなっていったようです。孤立してしまいうことはありませんでした」(佐川校長)

阿智中学校の生徒にも、清内路中学校の生徒を通してその校風や伝統を理解しようという積極的な姿勢が見られた。生徒会は、「互いの良さに学ぼう」というスローガンを打ち出し、文化祭での音楽会を合唱コンクール(写真2)にしたいと教師に提案した。

「事前交流で清内路中学校の合唱を聞いた生徒たちは、統合後はぜひ自分たちの学校の行事にも合唱を取り入れたいと思ったようです。年間行事予定は既に決まっていたため、教師の間で反対意見もありました。しかし私は、生徒の気持ちを尊重すべきであり、新しい学校文化をつくる機会にもなると考え、校長として開催を決めました」(佐川校長)

「清内路中学校の良さに学ぼう」という考えは、どの教師も共有している。清内路中学校から異動してきた教師は、担任する学級で毎日、朝と帰りの学活に合唱の時間を設けているが、これにならう教師が日ごとに増え、今では全ての学級に広まっている。

一方、反省すべき点もあったと佐川校長は



写真2 2010年度、清内路中学校との統合1年目に行った3年生の合唱コンクールの様子。朝と帰りの学活で毎日合唱の練習を続けている成果もあり、生徒の歌声は次第に良くなっている

振り返る。

「1学期の始業式・入学式の日、1年生は学級ごとに生徒一覧表を玄関に貼り出したのですが、2・3年生の分は貼り出しませんでした。清内路中学校の生徒には寂しい思いをさせてしまったかもしれません。11年度の浪合中学校、平谷中学校との統合では、全学年で貼り出す予定です」

保護者の交流にも課題があるという。

「それぞれの学区内では、保護者同士は子どもが小学校に入る前からの知り合いなので、互いの家庭のことは何でも知っていますし、分かり合っています。ところが統合によって、全く知らない保護者との付き合いが生まれました。そのため、子どもたちだけで遊びに行かせる時の注意点や保護者間の連絡の仕

方といったところに、認識のずれが生じているようです」(佐川校長)

清内路中学校の生徒の保護者との懇談会では、「統合後、先生方との距離が遠くなってしまう」という声が寄せられた。

「同校の保護者にとって、学校はもう一つの我が家のような存在です。教師に対しても家族のように接してきたため、統合後も学校に我が子の全てを把握してほしと期待しています。しかし、本校では教師一人が見る生徒数が多い上、生徒の自宅と学校との物理的な距離も広がりました。おのずと従来の関係は変わらざるを得ません。それだけに、保護者からの信頼を得るには、学校からの情報発信が鍵となると考えています。学校便りや学年便りで統合後の生徒の様子を細かく伝えていきます」(佐川校長)

生徒の交流に加えて 保護者の交流を充実

10年度は、浪合中学校と平谷中学校との統合に向けて事前交流を次のように行った。

◎合同授業(5月、11月)

5月は、平谷中学校の1・2年生と学級担任、管理職が来校。1年生は理科と音楽、2年生は国語と家庭科に分かれ、授業を受けた。11月は、浪合中学校と平谷中学校の1・2年生、学級担任が来校。1年生は英語、2年

生は国語、数学、理科、家庭科に分かれて授業を受けた。授業後、阿智中学校の生徒全員と同校の校歌を練習した。

いずれも授業後に、生徒と担任に「今日の授業の感想」(図2)を書いてもらった。「音楽の授業を受けて、はじめは緊張して怖かったけれど、隣りの人や後ろの人が話しかけてくれたので、楽しく出来ました」(1年生)、「行く前はとても緊張して嫌がっていましたが、同級生と少しでも話すことが出来て良かったようです」(2年生担任)という感想が寄せられた。合同授業が少なかった平谷中学校には、同校長の依頼もあり、3月に阿智中学校の教師が訪れ、数学と英語の授業を行った。

◎レクリエーション交流(7月)

2校の1・2年生が阿智中学校に来校。各学年で3校混合グループを作り、教室でビンゴゲームやトランプ、体育館でドッジボールなどをした。

◎運動会(9月)

2校の1・3年生と、阿智村立浪合小学校の6年生が阿智中学校の運動会に参加。4校混合のチームによるリレー、騎馬戦

などを行った。

◎生徒総会での交流(12月)

2校の1・2年生が阿智中学校の生徒総会に参加した。

佐川校長は、阿智中学校の雰囲気は両校の生徒に伝えられたらとうと話す。

「10年度は、日程調整が難しく、宿泊を伴う行事が実現しませんでした。この点は残念ですが、授業や運動会で生徒同士が笑顔で会話をしている様子が見られました。『あいつは面白い』『あの子は優しい』というように、どのような生徒がいるかを互いに知ることが出来たと思います」

図2 浪合中学校、平谷中学校との合同授業の感想

- ◎「阿智中学校のみなさんはすごくやさしくて、戸惑っている時に声を掛けてくれました。うれしかったです。一緒に理科の実験をした班の人と仲良くなって良かったです」(1年生)
- ◎「音楽の授業に出て、みんなとても明るく、社交的だと思いました。どんどん話し掛けてくれて、うれしかったです。最初、玄関まで私たちを迎えに来てくれましたが、その時は生徒の人数の多さにびっくりし、うれしさ半分、戸惑い半分でした」(1年生)
- ◎「阿智中学校は生徒の人数が多くて、最初はすごく緊張しました。でも、前の席の人が話し掛けてくれたので、良かったです。授業が終わった後も、何人かの人と話せて良かったです。多人数の授業の雰囲気もよく分かり、とても勉強になりました」(2年生)
- ◎「人数の多さと平谷中学校にはないにぎやかさに少し圧倒されている様子が見られましたが、阿智中学校の生徒に話し掛けてもらったりしたことで、授業の後半にはなじんできたようでした。帰る時は、満面の笑顔、戸惑いの残る顔など、いろいろな表情がありました。これからも交流が楽しみです」(平谷中学校1年生担任)
- ◎「平谷中学校の生徒は、阿智中学校の生徒のエネルギーに圧倒されていました。両校のエネルギーの向く方向が一つになり、大きな力となる喜びを平谷中学校の生徒たちに味わわせてあげたいと思います」(平谷中学校教頭)

清内路中学校との統合で課題となった保護者同士の交流の機会を設けようと、9月の授業参観には、浪合小学校と平谷村立平谷小学校

校の6年生の保護者、浪合中学校と平谷中学校の1・2年生の保護者を招き、阿智中学校の生徒の保護者と一緒に参観してもらった。

阿智中学校に見る 流行

互いの良さに学び新たな文化を築く

特色が一つになった時に

「統合」が完成する

浪合中学校と平谷中学校との統合により、阿智中学校の学区は六つの小学校から生徒が集まる、県内有数の広さとなる。

「学区が広がる分、生徒の個性もますます多様になると思います。だからこそ、学校生活の基盤となる学級づくりをしっかり行わなければなりません。生徒が互いの良さを認め合う関係を築くために、担任には、今まで以上に注意深く生徒一人ひとりと向き合うことが求められます。課題や悩みを担任一人が抱え込まないよう、学年団の結び付きを強めることが重要だと考えています」（佐川校長）

そこで懸念されるのは、11年度から使用する新校舎に教科ごとの研究室が設けられていることだという。

「職員室よりも研究室にいる時間が長くなれば、他教科の教師とあまり言葉を交わさなくなってしまう。教師同士のコミュニ

ケーションの機会をつくろうと、1日1回、特定の休み時間に全員が職員室に集まろうと呼びかけています」（佐川校長）

今後は、新しい阿智中学校を築き上げていく取り組みが本格化する。

「統合は、阿智中学校の良さと何かを改めて考える契機となりました。私は今、阿智中学校の良さの一つは、相手の良さを見つけようとする生徒がたくさんいることだと考えています。清内路中学校と統合後、生徒たちから『合唱コンクールをしたい』という声から自然に起こった時にそう強く感じたのです。どの学級でも毎日合唱をするようになった結果、最近では阿智中学校の生徒にも歌唱力が付いてきたと感じています。学校の大きな変化です。浪合中学校と平谷中学校との統合後も、2校の良さを吸収して更に変わっていくと思います」（佐川校長）

少子化や市町村合併などにより、学校の統合は今後も全国規模で続くことが予想される。佐川校長は、新・阿智中学校のこれから

について次のように話す。

「それぞれの学校の特色が一つになってこそ、統合は完成すると考えています。そのためには互いに学び合う姿勢が不可欠ですが、それを生徒にだけ求めているは何も始まりません。教師が率先して範を示してはじめて、生徒を動かせるのです。教師も生徒も、学びや気付きを得て少しずつ成長していくでしょう。その積み重ねが阿智中学校の新生につながります。課題はたくさんありますが、学校を活性化する契機と捉え、焦らずに、新たな学校文化をつくっていききたいと思えます」

佐川校長が考える教育の不易

中学校3年間は、生徒が心身共に子どもから大人へと成長する時期であるため、学習・生活両面でこまやかな声掛けが必要です。感情が大きく揺れ動くこともあります。褒めてほしい時、叱ってほしい時は、どの生徒にもあります。だからこそ、私たち教師はどこまでも生徒の心に寄り添い、一人ひとりがどのような時に、どのような言葉を求めているかを見極めなくてはなりません。そうしてこそ、教師の言葉は生徒の心に届くのです。若手の先生方には、いかなる困難に直面しても諦めずに、生徒の心に寄り添おうとする信念を持ち続けてほしいと考えています。

風通しの良さと広域連携で 小規模校の校内研修を活性化

山形県 尾花沢市立福原中学校

教師が互いに遠慮なく意見を言い合える雰囲気——。これが尾花沢市立福原中学校の特徴だ。学習指導案を練るとなれば、教科の枠を超えて、アイデアを出し合う。教職員17人という小規模校の不利な条件を克服すべく、学校ぐるみ、地域ぐるみで授業力向上に取り組む。

▼福原中学校に見る▼不易

風通しの良い雰囲気 で授業力向上

予告なし、準備なし
「研究カフェ」で気軽に意見交換

少しの空き時間に、教師がマグカップを手に集まり、発問の工夫について議論する――。

尾花沢市立福原中学校では、指導のアイデアがほしい時などに、教師同士が呼び掛けて「研究カフェ」を開く。スケジュールは特に決められていない。手の空いた教師が集まり、自由に意見交換をする場だ。

例えば、ICT教育を研究する三十代の教

師が、研究発表の準備を進めていた時のこと。

本番前に出来栄えを見てもらおうと、校長室を訪れた。池田史明校長はすぐに隣の職員室にいた教師に声を掛け、校長室で「研究カフェ」を開いた（P.24写真1）。

「必要な時に適宜開くのが『研究カフェ』です。アイデアがほしいその時に、いろいろな視点からの意見を聞けるメリットがあります。また、意見を言う側も他の人の意見が聞け、授業づくりの参考になります。私の役割は、必要だと思った時に、機を逃さず先生方

School Data

◎1947（昭和22）年開校。同校のある山形県内陸北部の尾花沢市は、越後高田、飛騨高山と並んで日本三雪の地とされる日本有数の豪雪地帯。校訓は「敬愛・努力・自学自修」。合唱が盛ん。



校長◎池田史明先生

生徒数◎115人 学級数◎5学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒999-4553 山形県尾花沢市大字野黒沢208

TEL◎0237-25-2041

URL◎<http://www.city.obanazawa.yamagata.jp/477.html>

公開研究会◎未定



尾花沢市立福原中学校校長

池田史明

Ikeda Shiro

「自分が好きで、自分に自信があり、何にでもチャレンジするような子どもたちを育てたい」

に声を掛けることと、時々茶菓子を差し入れることぐらいです」（池田校長）

「研究カフェ」の内容や形式にも堅苦しいルールはなく、事前の資料提出なども不要だ。池田校長は「余計な準備はしなくてよい」と呼び掛けていると話す。

「準備をすると、それにとらわれてしまいがちです。それでは良いアイデアが出ないと、思うからです」



写真1 研究発表の準備を進めている体育科の教師が「見てください」と校長室に来た。池田校長が教頭や他教科の教師にも声を掛けて「研究カフェ」が始まった。モニターを使ったプレゼンテーションに対して、教師はざっくばらんにアイデアを出し合った

子どもに良い影響を及ぼす 協力し合える教師関係を目指す

同校は生徒1115人、教職員17人の小規模校だ。校区は広く、学校から約8km離れたところに住む生徒もいる。多くの生徒は夏は自転車通学し、積雪のある冬は保護者が車で送り迎えをしている。三世代同居の家庭が多いためか、半数以上が祖父母による送迎だという。校区には小学校が4校あり、いずれも小規模校だ。学校が荒れていた時期もあったが、ここ10年は落ち着いている。

そうした環境の同校に池田校長が赴任したのは2009年のこと。以来、教師が発言し

やすく、校長室に出入りしやすい雰囲気づくりに気を配ってきた。この方針は、山形県教育センターでの経験が土台にあると池田校長は話す。

「当時、同僚と自由にアイデアを出し、ホワイトボードに書き込んで話し合いを重ねるという方法を度々行っていました。遠慮せずに意見を言い合えるためか、良いアイデアが出てくるのです。また、以前の勤務校では、『ほっとできる』『相談しやすい』という雰囲気が職員室にあり、先生方の働く意欲だけでなく、生徒にも良い影響があるという体験をしました。本校でも、そうした人間関係や『やれることを皆で協力して取り組もう』という雰囲気をつくりたいと思いました」（池田校長）

他教科の教師でも理解できる 学習指導案を目指す

校内に自由に発言できる雰囲気をつくりながら、同時に進めてきたのは年4回の校内授業研究会だ。

「いろいろな先生方を見てきて思うことは、初任校で教わった方法をそのままずっと続けている先生が多いということです。最初にきちんと教えてもらった場合はその後の指導もうまくいきますが、そうでないケースも見られます。そこで、学習指導案の書き方も授業

の進め方も、内容の良し悪しや先生方のキャリアを問わず、全員で見直せるような研究会にしています」（池田校長）

10年度は、山形県教育センターの研究協力校に指定され、同センターが開発・作成した「授業研究ハンドブック」を活用した研究を進めてきた。

「指導案の素案づくりから成果・反省まで、教師全員で取り組みました。特に力を入れたのは、授業の事前研究です。素案づくりの段階から、授業者本人と指導主事、周りの教師がチームを組んで進めました」（池田校長）

同校には、数学科担当は3人、英語科担当は2人いる。それ以外の教科担当は1人ずつしかない。そのため、各教科で個別に研修を行うことが難しい状況にあった。

「教科の間に垣根のようなものがあり、『専門以外の教科は分からない』という先生もいます。しかし、1コマの授業ごとに目標があり、そのための教材を準備し、どのように生徒に伝えるかを工夫することの大切さは、すべての教科に共通しています。また、教師全員で課題を共有して、活発な意見交換をすることで、生徒が分かる授業づくりを出来るよう、極力、教科特有の専門用語を使わずに、誰でも理解できる言葉で書かれた指導案を目標としました」（池田校長）

指導案の素案づくりの段階では「研究カフェ」も開き、どのような発問が良いのか、

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行



写真2 どの教室にも、後ろに「校長の椅子」が置かれている。池田校長は、時間を見つけては生徒と一緒に授業を受ける。「指導の内容を指摘するのではなく、生徒の態度の良さなどを話題にするように配慮しています」（池田校長）

同校は、山形県内陸北部の4市町から成る北村山地区にある。ここでは、地区の校長会が中心となり、地区内の中学校13校が連携して研修を行っている。07年度からは、「創意工夫に満ちた教育課程の編成・実施」を学校経営研究テーマに掲げ、共同研究を進めてきた（P.26図1）。

連携校には同校と同じような小規模校が多く、教科担当が1人しかないために校内研究が成立しにくいという課題を抱えていた。そこで、各校の授業研究会の日程と内容を記した「地区内授業研究会一覧」を作成し、他校の授業研究会への参加を奨励。また、教育

委員会の協力を得て、教務主任や研究主任のための研修会を開催している。

特筆すべきは、地区内の全小・中学校の校内研究をまとめた『北村山の学校』の発行だ。各校が設定したテーマに基づき、実践に役立つ指導や調査研究の結果などをまとめて掲載。09年度までに57集を発行している、半世紀以上、毎年続いている取り組みだ。

「多くの研究成果に触れることで、校内研究の機会の少なさを補えます。また、小・中学校の実践を別々にまとめず、一冊に統合することで、小学校の取り組みからも学ぶことが出来ます」（池田校長）

このように、昔から学校が地域ぐるみで力を合わせて学力向上に取り組む同地区の気風も、福原中学校の研究を後押ししている。

どのような構成にすれば良いか、教師は教科の枠を超えて話し合う。

「先生方は、直接顔をつき合わせて話し合った方が楽しく、良いアイデアが出ると言っています。授業者は、出てきた案から自分に合うものを取り入れてまとめ上げるのは大変ですが、それも勉強になると捉えているようです」（池田校長）

このようにして指導案作成に重点的に取り組んだ結果、どの教科の教師にも分かりやすい指導案を作れるようになっていった。ある教師は、生徒の実態を分析した結果など、指導案を作る際にポイントとなる個所に吹き出しを付けた。これは、同校ではそれまでにな

かったスタイルだ。すると、これが分かりやすいと好評で、他の教師もこの方法を取り入れるようになった。前例がなくても、新しいアイデアに挑戦する、冒険できる、良いものは積極的に取り込んでいく。そうした雰囲気

が校内に根付いてきている。

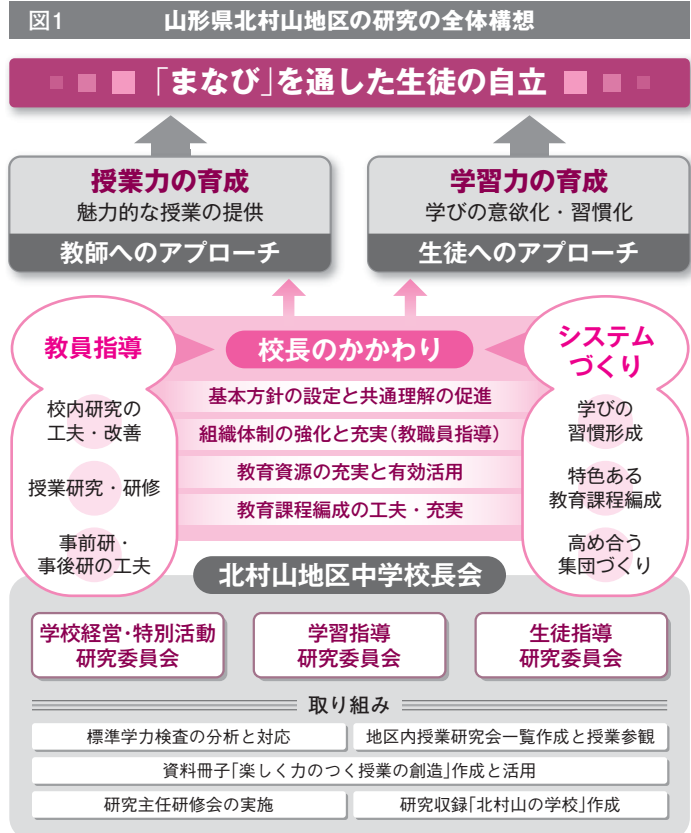
同校では、教師が夜遅くまで残っていることがほとんどなく、遅くとも夜7時半ごろに

は帰るといふ。職員室で声を掛ければすぐに始められる「研究カフェ」のような柔軟なスタイルを取り入れた結果、準備段階での心理的な負担が減っただけでなく、検討会の開催そのものに必要な準備が省け、形ばかりの準備もいらなくなった。同校の場合、形にとらわれないフットワークの良さが、全体的な業務の効率化にもつながっているのだろう。

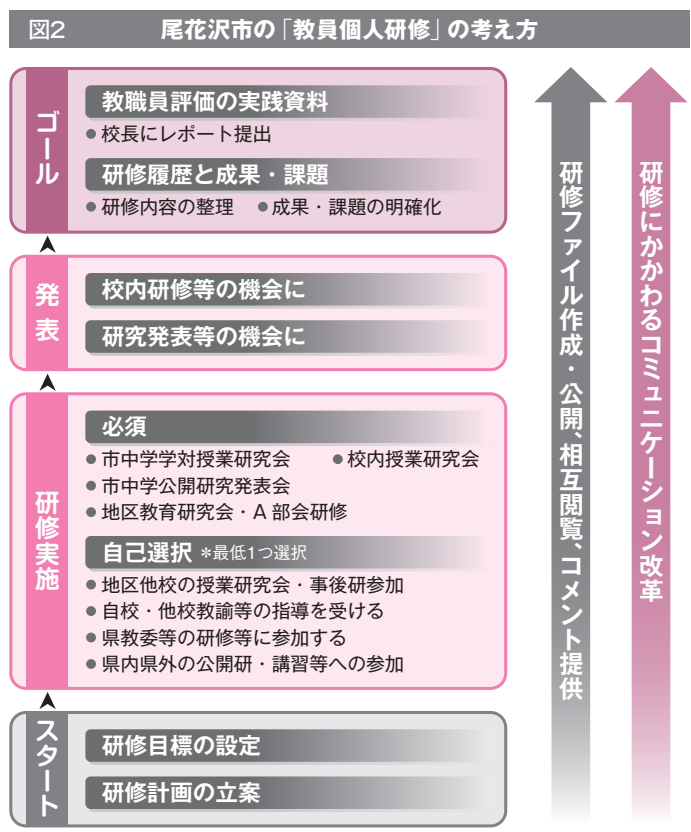
福原中学校に見る「不易」

地区内の小・中学校挙げての学力向上

地区内の13中学校が連携し互いに授業力を高める



*同校の資料を基に編集部で作成



*同校の資料を基に編集部で作成

福原中学校に見る「流行」

研修体制を改善し、やりがいを高める

「個人研修ポートフォリオ」で
研修の積み重ねを実感

地区全体だけでなく、尾花沢市内の中学校
全5校による授業力向上の取り組みもある。

一つは、年1回の同一日程による授業研究会だ。A中学校は数学、B中学校は英語というように、学校ごとに教科を分担し、同じ日に授業研究会を開催するもの。市内の同じ教

科の教師が顔を合わせて話したり、課題を共有したりする良い機会となっている。

もう一つは、市の中学校長会の主導により

10年度に始めた「校内授業研究会」だ。これは、「校内授業研究会」や「市中学公開研究発表会」といった必須の研修に加えて、教師個人が自己選択で研修を受けるというもの(図2)。年度初めに自分で目標と研修計画を立て、それに沿って実践していく。研修の資料

やレポートは「個人研修ポートフォリオファイル」に綴じる(写真3)。このファイルは校長室の棚に置いてあり、他の教師も閲覧して気付いた点やアドバイスを自由に記入することが出来る。

「どの先生のファイルも分厚く、自分のために取り組んだ研修の履歴を実感できるファイルになっています。『自分はこれだけのことをした』という自信を持って、周囲にアピールできる材料にもなるはずですよ」(池田校長) 09年度まで、市の中学校長会の取り組みとして教員個々が研究成果を発表する個人研究発表会を年1回行ってきた。その成果を踏ま

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行



写真3 「個人研修ポートフォリオ」のファイル。外部研修などの資料1年分を1冊のファイルに綴じる。これは、1カ所にまとめて置かれ、どの教師も自由に見て、気付いた点やアドバイスを書き込んでいる

え、更に教科に限らず視野を広げる方向の教員個人研修に切り替えた」と、池田校長は話す。

「本来、大切なのは、『発表のための研究』ではなく、『自分のための研修』です。そこで、教科単位ではなく、個人単位での研修を始めることにしたのです」

小規模校で1教科に担当者が1人しかいないければ、個人的な研修のために出張するのは難しい。しかし、個人研修の計画にあるものは、基本的に許可するように各校の校長とで申し合わせた。

『教員個人研修』はまだ1年目で、先生方に浸透しているとは言い難い状況です。ただ、自ら外部の研修に向く先生が増えてきているので、そうした姿を伝えて、広めていきたい

「と思います」(池田校長)

生徒に夢を持たせるために 教師のアイデアが問われる

「俺、生きがいがないんだよ」

約二十数年前、受け持っていた生徒がポツリと漏らしたこの言葉が、池田校長の教育の原点だ。校内暴力が社会問題化していた時代、荒れていた学校で生徒指導主事を務めていた池田校長は、関係各所に謝罪に回る日々を送っていた。この言葉を聞いた時も、謝罪の帰り道だった。

「とにかく驚きました。十代そこそこの子どもがそんなことを言うのですから。真つ先に考えたのは、『夢を持てる生徒を育てよう』ということ。学力を伸ばすことに加えて、自己有用感を与える場としての授業づくりの大切さを痛感しました」(池田校長)

同僚にネーミングが上手な教師がいた。補習の時間を「ブラッシュアップタイム」と名付けると、それまで見向きもなかった生徒が次々と参加した。池田校長は、生徒を学習に向かわせるためにアイデアを出し合う重要性を痛感したという。教師同士が自由に話し合える雰囲気づくりに腐心しているのも、それが夢を持てる生徒を育てることにつながる

と考えるからだ。「アイデアを出したり、意見を交わすにし

池田校長が考える教育の不易

PDCAとよくいわれますが、私はPlanとDoの間に「Set(準備・段取り)」が必要だと考えています。これは、生徒が主体的に活動できるための仕組みですが、案外おろそかにされがちです。生徒の活動計画があっても、実際には教師が一方向的に指示をしている場面がよく見受けられます。

何をどのようにするかを理解し、生徒が自ら行動するならば、意欲と自信が得られます。結果としてうまく出来たとしても、それが教師の指示によるものならば「やらされ感」が残り、指示待ち人間になってしまうでしょう。生徒をその気にさせて動かす「Set」が出来る教師でありたいと思います。

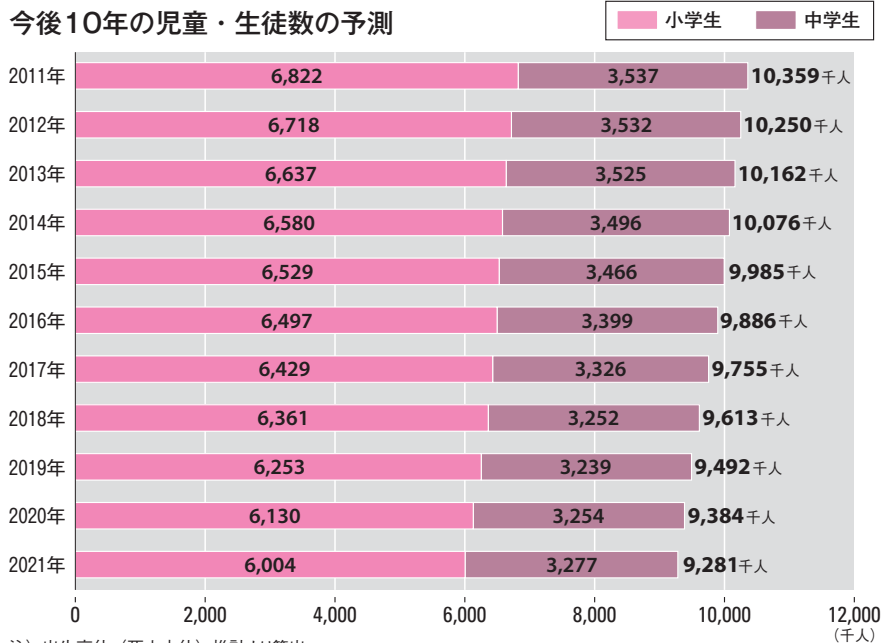
でも、たたき台が必要です。議論のもとがあり、そこから磨かれていくからこそ、良い取り組みとなるのです。私は理科が専門ですが、以前3年間かけて作った問題集を、先日、先生方に見ていただきました。それをまねしてほしいというのではなく、この問題集から何か別の取り組みに発展させてほしいと思っただけです。アイデアは自分の経験からしか生まれません。自分が良いと思うものを先生方と共有し、波及させ、更に良いものとなるように努めていきたいと思えます」(池田校長)

データで見る中学校教育の課題

中・長期的な視点から中学校教育の未来を考えるとさまざまな課題が浮かび上がってくる。今回の特集に関連したデータから、未来へ向けた手立てを考えたい。

1 今後10年で子どもは約1割減少

今後10年の児童・生徒数の予測

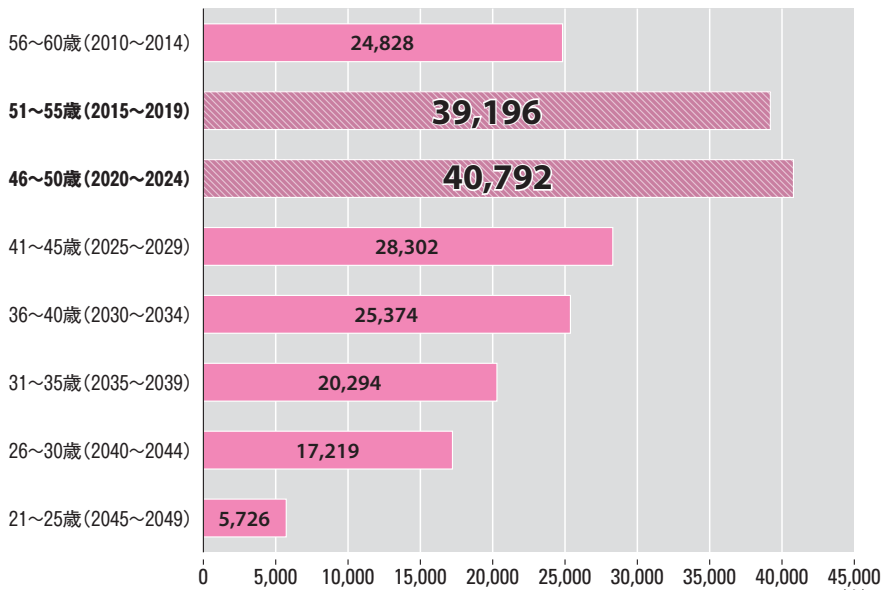


注) 出生高位 (死亡中位) 推計より算出

出典/ 国立社会保障・人口問題研究所ウェブサイト <http://www.ipss.go.jp/>

2 大量退職のピークは2015~24年

公立中学校の年齢別教員数



注) () 内は該当年齢の教師が定年退職する年度

*文部科学省の資料 (2011.3.31) を基に編集部で作成

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第1回

中学校教育の不易と流行

3 国際比較で見た日本の子どもたちの学力には課題も

OECD生徒の学習到達度調査の結果推移

	2000年(32か国)		2003年(41か国)		2006年(57か国)		2009年(65か国)
読解リテラシー	522点(8位)	➡	498点(14位)	➡	498点(15位)	➡	520点(8位)
数学的リテラシー	557点(1位)	➡	534点(6位)	➡	523点(10位)	➡	529点(9位)
科学的リテラシー	550点(2位)	➡	548点(2位)	➡	531点(6位)	➡	539点(5位)

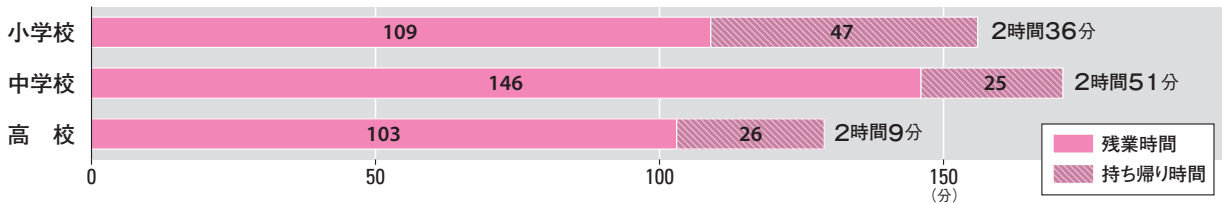
国立教育政策研究所「学力向上に関するこれまでの施策とPISA2009の結果」より抜粋

- 読解力を中心に我が国の生徒の学力は改善傾向にある。しかしながら、トップレベルの国々と比べると下位層が多い
- 読解力については、必要な情報を見つけ、取り出すことは得意だが、それらの関係性を解釈したり、自らの経験や知識と結びつけたりすることがやや苦手である
- 数学的リテラシーについては、OECD平均は上回っているが、トップレベルの国々とは差がある
- 趣味で読書をするのではない生徒の割合は、2000年調査から減少(55.0→44.2%)したものの、諸外国(OECD平均37.4%)と比べると依然として多い

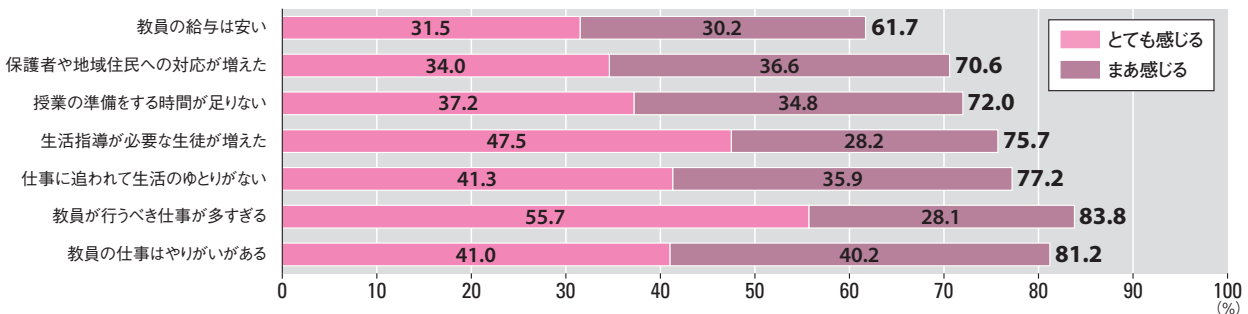
出典/国立教育政策研究所 OECD 生徒の学習到達度調査(PISA)
<http://www.nier.go.jp/>

4 多忙さに悩む中学校教師

Q. 1日の残業時間、持ち帰り仕事にどれくらい時間がかかりますか?(勤務日)



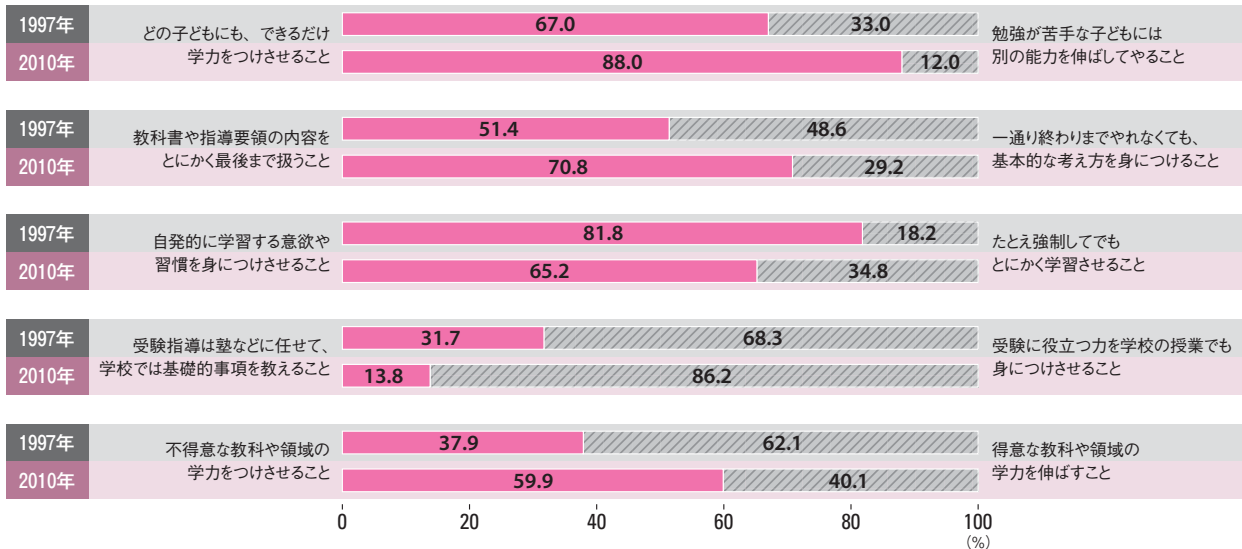
Q. 次のようなことをどのくらい感じますか?(中学校教師)



出典/小・中学校: 東京大学「教員勤務実態調査(小・中学校)報告書」(2007年)、高校: 文部科学省「教員勤務実態調査(高等学校)報告書」(2007年)
<http://benesse.jp/berd/>

5 教師の指導観は「確かな学力」の定着重視へ

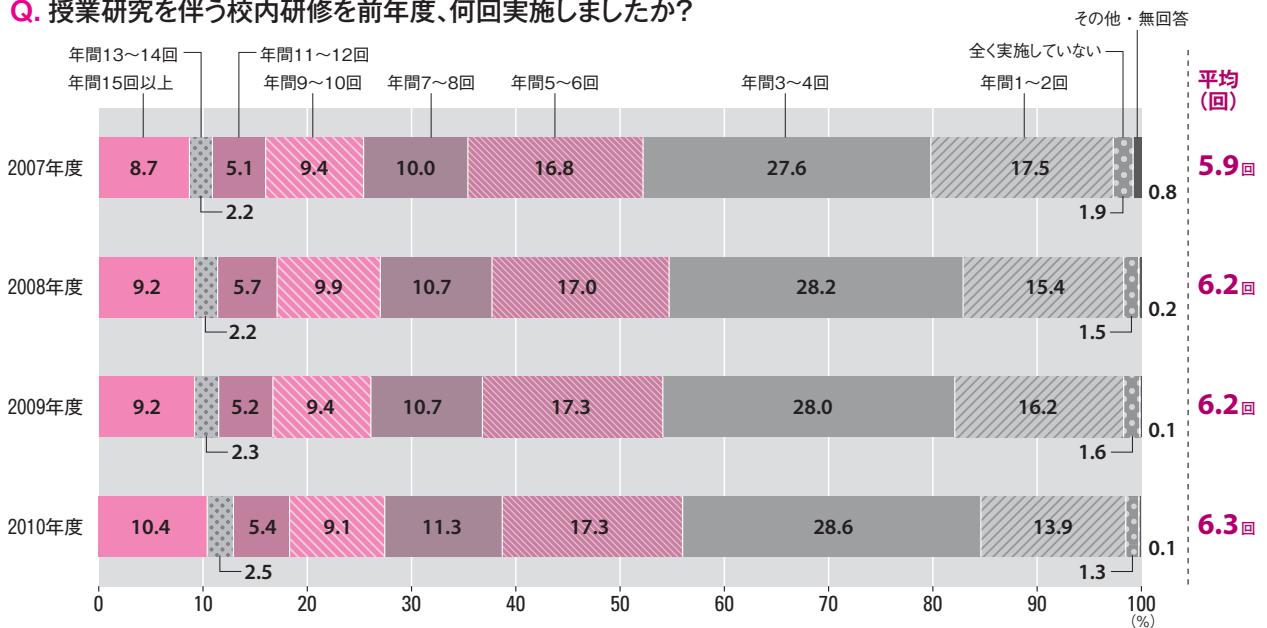
Q. 授業や生活指導の面でどのようなことを大切にしていますか。
あえていえば重視していると思うほうはどちらですか？



出典／ Benesse 教育研究開発センター「第5回 学習指導基本調査」(2010年)
<http://benesse.jp/berd/>

6 授業研究を伴う校内研修の回数は微増傾向

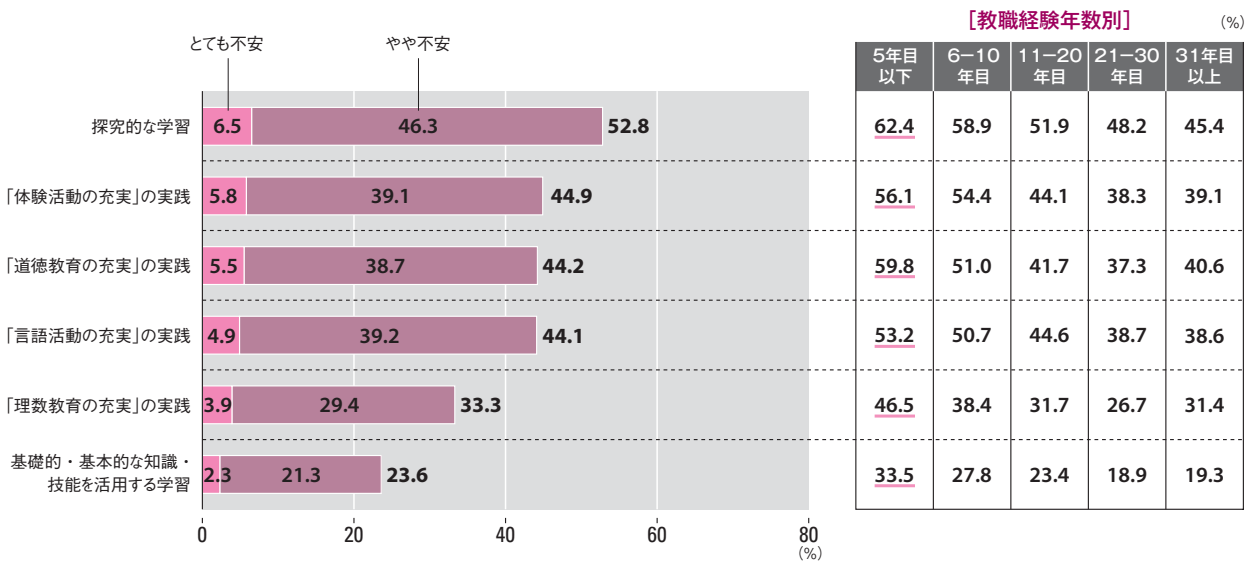
Q. 授業研究を伴う校内研修を前年度、何回実施しましたか？



出典／ 文部科学省「全国学力・学習状況調査」(2010年)
<http://www.nier.go.jp/>

7 5割の教師が「探究的な学習」に不安

Q. 2012年度から実施される新学習指導要領の以下の内容を実施するにあたり、あなたはどれくらい不安を感じていますか？

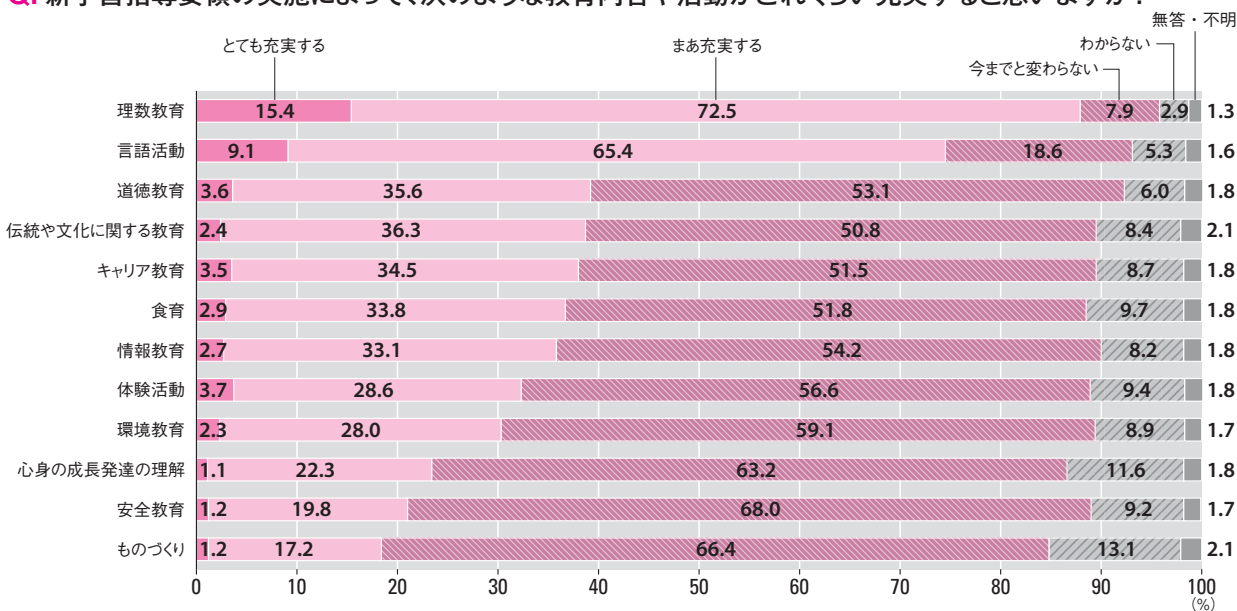


注) 教職経験年数別の数値のうち、最大値に下線を引いている

出典 / Benesse 教育研究開発センター「第5回 学習指導基本調査」(2010年) <http://benesse.jp/berd/>

8 新教育課程では理数教育や言語活動が充実と予想

Q. 新学習指導要領の実施によって、次のような教育内容や活動がどれくらい充実すると思いますか？



出典 / Benesse 教育研究開発センター「中学校の学習指導に関する実態調査報告書」(2010年)

<http://benesse.jp/berd/>

2010 Vol.4 特集「意欲を引き出す『家庭学習』指導」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*「VIEW21」中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト(<http://benesse.jp/berd/>)でご覧いただけます。

◎「意欲を引き出す『家庭学習』指導」は本校の課題の一つであり、今回の特集は参考になりました。特に、国立教育政策研究所・山森光陽先生の話は、課題を整理し、どう解決・改善につなげるか、取り組みの視点が明確に紹介されていました。[千葉県／K中学校／O・H]

◎山森先生のインタビューで「1人でする宿題にこそ、個人差を考慮した題材を渡す必要がある」という言葉が、今までの一斉課題を見直すことに役立ちました。

[埼玉県／K中学校／O・H]

◎山森先生の話にあった「可処分時間」の考え方に非常に共感しました。他教科と調整をしないまま、教師の視点だけで宿題を出すことがあります。可処分時間をしっかり考え、現実的な家庭学習課題を出す必要があると思いました。

[島根県／M中学校／T・Y]

◎家庭学習の習慣化は、全国どの中学校でも悩み苦しむ課題で、まさにアイデア勝負です。登米市立東和中学校が「朝の学び合い」を設け、時間を確保している事例は、本校でも取り入れたいと思いました。ただ、本校は極小規模校であるため、限界があると思います。1クラス5人以下の学校では成立しにくいでしょう。まだ工夫が必要です。

[鹿児島県／S中学校／S・M]

◎登米市立東和中学校の「サイクル学習」は、年間計画にきちんと位置付けられ、課題内容が三つに分けられていて大変参考になりました。また、どの事例も、自校

化の観点が、それぞれ分かりやすくまとめられていた点がよかったです。

[茨城県／Y中学校／K・H]

◎常陸太田市立北中学校の「学び方の手引」が授業用と家庭学習用に分けられている点を、本校でも取り入れたいです。特に家庭学習の大切さを具体的な形で生徒や保護者に伝えられているかを見直し、改善する必要があると思いました。

[大阪府／T中学校／Y・A]

◎岡山市立岡北中学校で、「小学校と連携して予習を大事にする」という点がとても新鮮でした。また、小学校との連携で「教えて考えさせる授業」に取り組んでいる点にも感心しました。学力保障は、分からない・間違えた部分の補充に目が行きがちですが、予習をすると1時間の授業の質が変わり、授業の中身がよいつかめると思いました。

[大分県／N中学校／K・Y]

◎南会津町立檜沢中学校のeラーニングは画期的な取り組みで明確な成果もあり、興味深く読みました。しかし、記事だけでは具体的なイメージを持ちにくかったのが残念です。

[秋田県／K中学校／K・H]

◎小規模校の事例が多く、中・大規模校では応用が難しいのではないかと感じる取り組みもありました。ただ、どの事例も専門家が「自校化の視点」を示していたので、参考にすべき点が分かりやすくまとめられていてよかったです。

[富山県／F中学校／O・H]

お知らせ

文部科学省が**震災地の学校と提供者を結ぶ**マッチングサイトを開設しています

「東日本大震災 子どもの学び支援ポータルサイト」<http://manabishien.mext.go.jp/>

編集後記

社会が変化中、人材、モノ、予算のすべてが限られた条件下で、公立中学校がすべての子どもに学力と進路を保障し続けるためには？——この課題意識から、今号の特集企画は出発しました。企画や取材を通して、全国の先生方が、それぞれのご経験と想いに基づき、さまざまな角度から未来を見据えた学校づくりをなさっていることを実感しました。こうした取り組みが広く共有され、自校化されることに『VIEW21』をお役立ていただければ幸いです。今年度もよろしく願い申し上げます。(久保木)

VIEW21 中学版 2011 Vol.1

2011年4月28日発行／通巻第309号

発行人 新井健一
 編集人 原茂
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
 Benesse教育研究開発センター
 (株)ビーヴィオーコーポレーション
 (有)ペンダコ
 印刷製本 二宮良太、山口横治
 編集協力 荒川潤、川上一生、南弘幸
 執筆協力
 撮影協力

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部

電話 **03-5320-1287**

〒163-0411東京都新宿区西新宿2-1-1
 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2011